

## 「労働の二重性」論の論理

川 崎 誠

## はじめに

筆者は先に拙稿「『商品の二要因』論の論理」（本月報 475 号所収 [2003. 1]）で、『資本論』首章冒頭節「商品の二つの要因 — 使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」の論理的展開をヘーゲル論理学との連関において辿った。本稿は同じく商品章第二節「商品に表わされる労働の二重性」の論理を探るものである。ただし前稿にも記したことだが、ここで言う論理とはマルクスが

私は、自分があの偉大な思想家（ヘーゲル）の弟子であることを公然と認め、また価値理論にかんする章 im Kapitel über die Werttheorie のあちこちで、彼に固有な表現様式に媚を呈しさえした。（『資本論』第二版「あと書き」）

と述べていることを根拠に、『資本論』をヘーゲルの思弁論理に忠実なテキストと見るかざりのものである。『資本論』のように大きな（大部の・偉大な）テキストであれば、その読みはもとより多様であり得よう。経済学に膨大な蓄積の存することは言うまでもなく、また例えば『資本論』

## 目 次

はじめに	1
一 第二節の序論	2
二 本質的存在としての有目的労働	4
三 仮象する労働	6
四 労働の反省論	14
編集後記	50

を歴史理論として読む労作からは、私自身極めて有益な示唆を得た。それら多様な読みとの優位を競う意図はもとより本稿になく、『資本論』の論理進行を思弁論理の視座から確認すること、これだけが関心の的である。

と同時に、かかる確認の『資本論』を読み解く上で必要であることも、また否めないように思われる。詳しくは本文に譲るが、第二節にかぎってみても、初版と第二版の構成の違い、一見第一節との類似を思わせる叙述、似通った叙述内容の第二節内での反復等、検討すべき点は少なくなく、それらに解を得る上で論理の進行を忠実に辿ることが不可欠と考えられるからである。

使用した『資本論』の邦訳テキストは、新日本出版社刊『資本論』（全13分冊。資本論翻訳委員会訳）の第一分冊である。また参照する『大論理学』の頁数は岩波全集版（全四巻、武市健人訳）のそれである——以下では上巻の一をⅠ、同二をⅡ、中巻をⅢ、下巻をⅣと略記する——。ただし訳語は必ずしも武市訳のままではない。なお『大論理学』については適宜以文社刊（寺澤恒信訳）の第二巻をも参照し、また『資本論』の初版は幻燈社書店刊（江夏美千穂訳）を用いた。さらに『精神現象学』の邦訳テキストは平凡社刊（樫山欽四郎訳）を参照した。

各パラグラフのはじめに『資本論』と『大論理学』との対応を

(1) p. 70 ⇔ Ⅲ 第二巻本質論の [1. 有から本質への過程] p. 3~5

のように示す。矢印の左が『資本論』のパラグラフ番号と邦訳テキストの頁数、右が直接対応する『大論理学』邦訳テキストの巻数・標題・頁数である。

## 一 第二節の序論

(1) p. 70 ⇔ Ⅲ 第二巻本質論の [1. 有から本質への過程] p. 3~5

最初に、商品は二面的なもの *ein Zwieschlächtiges* として、すなわち使用価値および交換価値として、われわれの前に現われた *erscheinen*。のちには、労働もまた、それが価値に表現されるかぎりでは、使用価値の生みの母としての労働に属するのと同じ特徴を、もはやもっていないということが示された。商品に含まれる労働のこの二面的性質 *diese zwieschlächtige Natur* は、私によってはじめて批判的に指摘されたものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な点 *Springpunkt* であるから、ここで立ち入って説明しておこう *näher beleuchten*。

後に実例を示すように、本第二節の記述は第一節「二要因論」と類似するものが少なくない。その理由をマルクスは、労働の二面的性質を立ち入って説明するためとしているが、では「立ち入った説明」とはどのような<sup>たち</sup>質のものであるのか。

ヘーゲル論理学で本質論は有論を承ける。すなわち「有 *Sein* の真理 *Wahrheit* は本質 *Wesen*」(p. 3)

であり、直接的な *unmittelbar* 有は自らを超出する道 *Weg des Hinausgehens* あるいはむしろ沈潜する道 *Weg des Hineingehens* を歩むことで媒介されたもの *ein Mittelbares* としての本質に達した。「有自身の運動」(同)であるこの行程 *Gang* において有は本質になる。すなわち「認識は一般に多様な定有 *Dasein* にとどまることはできないが、それはまた有、純粹有 *reines Sein* にとどまることもでき」(同)ず、それゆえ認識は直ちに *unmittelbar* 反省 *Reflexion* を行なうが、この反省とは「純粹有、すなわち、すべての有限なものの否定が、直接的定有を純粹有にまで純化した想起 [内化] と運動とを前提している *die Negation alles Endlichen, eine Erinnerung und Bewegung voraussetzt, welche das unmittelbare Dasein zum reinen Sein gereinigt hat* という反省」(p.4)である。この反省によって、多様な定有が純粹有の外化 *Äußerung* であるという有論の見地は、その一面性を補われて全面的な見方へと前進し (以文社版 p.283 訳者注)、有は本質として規定される。かくして本質は有の本質であり、直接的なものは媒介されたものとして捉え返される。

ところで学の始元 *Anfang der Wissenschaft* である純粹有は、「前進 *Vorwärtsschreiten* はむしろ後退 *Rückwärtsgehen* である」(I p.62 第一巻有論) ところの円環運動 *Kreislauf* において同時に根拠 *Grund*・結果 *Resultat* でもあるから、その外化は理念 *Idee* の外化 [疎外 *Entfremdung als Entäußerung*] として把握され、反対にそれへの内化は理念への還帰 *Rückgang* でもある。このことを次のように換言できる。本質は有の完全な自己還帰であるから — 本質は有であることで自ら本質であることを示すから、「本質が有の自己還帰である」ことを「本質→有」と図示することができる —、最初は「無規定的な本質」(p.5)であり、有の諸規定は止揚されている。それらは即自的に本質に含まれるのみで、「本質において措定されている」(同)のではない。かかる自己の単純性の中にある絶対的本質は何らの定有をもたないが、本質は即且向自有 *Anundfürsichsein* であるから定有へ移行しなければならず、すなわち本質はそれが即自的に含むところの各規定を区別する自己反撥 *Abstoßen* であり、「自己に対する否定的関係」(同)である。それゆえ「本質の諸規定は有の諸規定とは別種の性格をもつ」(同)。すなわちそれは本質の即且向自有という統一の中にとどまり、各規定そのものも他者としての他者ではなく、また他者の関係でもなく、「自立的なものであるが……相互の統一の中にある」(同)、そのような規定である。

かくして止揚された有・本質に即自的に含まれる規定性を自己の領域の中で措定する、ここに本質論の課題がある。「二要因論」と「労働の二重性論」とにおける叙述の類似も、したがって、有論的な規定が本質論的に規定し直されているものと解されよう。換言すれば、第一節で「一つの [或る] 物 *ein Ding*、一つの外的対象」(第一節ニパラグラフ) として、商品交換という有的 (直接的)・外的な関係において把握された商品が、第二節ではそれを生産する労働 (働きとしての関係) においてあるものと捉え返されることで、本質論の論理が見出されるのである。この意味で第一節の「事物の論理」に対しては、第二節では「関係の論理」が中心になるだろう。ただし本

質論といっても、第二節の対応する『大論理学』は「第一篇自己自身における反省としての本質」の「第一章仮象」にかざられ、「有の残り物 *Reste des Seins*」(Ⅲp.17 第一章仮象「B仮象」)たる非本質的存在および仮象と、その残り物が止揚される運動としての反省がそこでの主題である。

## 二 本質的存在としての有的労働

(2) p. 71 ⇔ Ⅲ第一章仮象「A本質的存在と非本質的存在」の [1. 本質的存在と非本質的存在] p. 10~11

二つの商品、たとえば一着の上着と一〇エレのリンネルをとってみよう。前者は後者の二倍の価値をもつものとすれば、10 エレのリンネル = W のとき、1 着の上着 = 2W である。

第一節「商品の二要因」論で商品は価値として措定されたが、論理的にその価値は有論の最後のカテゴリーたる度量 *Maß* であり、その度量の完成態無差別 *Indifferenz* は即自的に *an sich* 本質であるから (Ⅱp. 286 第三章本質の生成)、本パラグラフの二つの等式「10 エレのリンネル = W」「1 着の上着 = 2W」は一般的に「有 (使用価値) = 本質 (価値)」である。両者が「=」で結ばれるように、ここで有と本質の「価値は同等 *in gleichen Werte*」(p. 11) であるが、このことの意味は次の点にある。

「本質は止揚された有」(p. 10) であるから、本質はその「生成の源」(同) である有 (直接態) を自らの内に保存・維持して「その直接態 *Unmittelbarkeit* を自己に対立させる *gegenüber*」(同) — *Unmittelbarkeit* を「直接態」と訳すことについては、以文社版『大論理学』第一巻の「訳者のまえがき」(p. 26) を参照 — 。それゆえ有は本質の他者 *Andere* として「非本質的存在 [非本質的なもの] *das Unwesentliche*」(p. 10) であるが、そうであれば対する本質も「有的な、直接的な本質」(同) である。かくして有と本質は各々「一つ [或る] の有 *ein Sein*、すなわち相互に無関心な *gleichgültig* 直接態」(同) をもって同等であるから、本質は「本来の意味での本質 *eigentliches Wesen* ではなくて、有とは別の仕方規定された定有 [定在]、すなわち本質的存在 [本質的なもの] *ein anders bestimmtes Dasein, das Wesentliche*」(p. 11) にすぎない。

(3) p. 71 ⇔ Ⅲ「A本質的存在と非本質的存在」の [2. 第三者の外面的見地による両者の区別] p. 11

上着は、一つの特異な *besonder* 欲求を満たす一つの使用価値である。それをつくり出すためには、一定の種類の *ein bestimmt Art* 生産的活動が必要である。この活動は、その目的、作業様式、対象、手段、および結果によって規定されている *bestimmt*。その有用性がこのよ

うにその生産物の使用価値に — またはその生産物が使用価値であるということに — 表わされる労働を、われわれは簡単に有用的労働と呼ぶ。この観点のもとでは、労働はつねにその有用効果との関連で考察される Unter diesem Gesichtspunkt wird sie stets betrachtet mit Bezug auf ihren Nutzeffekt。

本質的存在と非本質的存在とが共に定有であるなら、ここに本質は「定有の領域に逆行 zurückfallen」している (p. 11)。つまりそこでは本質は本質ではあるが、「それもただ或る他者に比べてみてのことで nur gegen Anderes、一定の顧慮 [見地] の下で in bestimmter Rücksicht、そうであるにすぎない」(同)。だから「定有の形で本質的存在と非本質的存在とが互に区別されるかぎり、この区別は一つの外面的な措定 ein äußerliches Setzen であり) …… 第三者が行うところの分離 Trennung である」(同)。そしてこの「外面的な顧慮と考察 Betrachtung」(同) の立てる区別ゆえに、「同一の内容が時には本質的と見られ、時には非本質的と見られ」(同)、つまり「何が本質的存在に属し、何が非本質的存在に属すかは不定である unbestimmt」(同)。

上着の使用価値は「(人間の) 一つの特殊な欲求を満たす」ものとして上着以外の第三者による外面的な措定であるから — 美食家にとっての珍味は粗食家にとっては何物でもなかるう —、「時には本質的 (欲求を満たす) と見られ、時には非本質的 (満たさない) と見られる」。つまりここで使用価値は本質的存在ではないものとしての非本質的存在、或いは非本質的存在ではないものとしての本質的存在、すなわち「互に区別される」ものであり、この区別の下で「一つの使用価値」は「単に他者と規定されている bestimmt」(同) ところの他者と関係し合う。そして使用価値が外面的に措定されるなら、それをつくり出すための「一定の種類 of 生産的活動」もその目的等によって「規定されている」ところの「有用的労働」として、「つねにその有用効果との関連で考察される」。

(4) p. 71 ⇔ III 「A本質的存在と非本質的存在」の [3. 仮象への移行] p. 11~12

上着とリンネルとが質的に異なる qualitativ verschieden 使用価値であるのと同じように、それらの定在 [定有] を媒介する労働 die ihr Dasein vermittelnden Arbeiten も質的に異なるもの — 裁縫労働と織布労働である。もしもこれらの物が質的に異なる有用的労働の生産物でないとすれば、それらはおよそ商品として相対することができないであろう。上着が上着と交換されることはなく、同じ使用価値が同じ使用価値と交換されることはない。

さて本質が単に本質的存在として非本質的存在と対立するとき、それは止揚された有 aufgehobenes Sein または定有である。しかしこのとき本質は「単に第一の否定 die erste Negation に

すぎず、または規定態（質）としての否定にすぎない」（p.11）。すなわちこの否定によって有は単なる定有であり、定有は「単なる他者」（同）である。けれども「本質は有の絶対的否定態 absolute Negativität である」（p.12）から、それは単に他者として規定されている *nur als ein Anderes bestimmt* のではなく、「直接的有としても、また或る他在に結びついているような否定としての直接的否定としても止揚されたところの有 *das Sein, das sich sowohl als unmittelbares Sein wie auch als unmittelbare Negation, als Negation, die mit einem Anderssein behaftet ist, aufgehoben hat*」（同）—— すなわち「第一の否定の否定 *die erste Negation der Negation*」（I p.127 第二章定有）。「直接的有」が止揚されているのであるから、それは媒介された有である —— である。したがって「有または定有も自己を本質とは別のもの *Anderes* として（本質との関係において）保持しているのではない」（同）。つまり本質と区別される直接的なもの —— 換言すれば、その真理態においては媒介されているにも関わらず、媒介されていないものとして把握されたもの —— は単に非本質的な定有でなく、むしろ「即且向自的に [全く] 空 [無的] な直接者 *das an und für sich nichtige Unmittelbare*」（同）として非本質 *ein Unwesen*・仮象 *Schein* にすぎない（同）。

上着とリンネルとは「質的に異なる使用価値」すなわち「規定態（質）」（有論第一篇の標題）として、互に対立するところの定有 [定在] である。しかし「商品として相対する」とき、それらは「質的に異なる有用的労働」に媒介されて「本質（労働）と別のもの」でなく —— なお「本質論の全体を通じて、『本質』とはそもそも『否定する運動』であり」（以文社版 p.284 訳者注）、この意味で媒介する働きである ——、むしろその仮象である。使用価値は、前節で他の使用価値の直接的な否定（交換関係）であったが、本節では媒介する働き（労働）との連関において把握された。かく「第一の否定の否定」と把握されて「上着が上着と交換されることはなく、同じ使用価値が同じ使用価値と交換されることはない」のだが、ということは第一に、媒介されていない使用価値は商品として交換されないこと、しかし第二に、そうした使用価値も単なる規定態（質）としては存在することを示している。第一については次パラグラフで、第二については七パラグラフで関説されるだろう。

### 三 仮象する労働

（5）p.72 ⇔ III 第一章 仮象「B 仮象」の [1. 仮象としての有] p.12~14

さまざまな種類の使用価値または商品体の総体のうちには、同じような多様な *mannigfaltig*、属、種、科、亜種、変種を異にする有用的労働の総体 —— （労働の）社会的分業 *gesellschaftliche Teilung der Arbeit* —— が現われている *erscheinen*。社会的分業は商品生産の実存条件 *Existenzbedingung* である。もともと、逆に、商品生産は社会的分業 [社会的な労働分割] *gesellschaftliche Arbeitsteilung* の実存条件ではない。古インド的共同体 *altindische Gemeinde* では、労働は社会的に分割されている *geteilt* が、生産物は商品になっていない。あるいは、

もっと手近な例をあげれば、どの工場でも労働は体系的に分割されているが、この分割は、労働者たちが彼らの個別的生産物を交換する austauschen ことによって媒介されているのではない nicht vermittelt。自立的な selbständig、互いに独立の unabhängig、私的労働 Privatarbeit の生産物だけが、互いに商品として相対するのである gegenübertreten。

同じく労働の分割でありながら、古インドの共同体や工場におけるそれが生産物を「互いに商品として相対」せしめないのはなぜか。それらと「自立的な、互いに独立の、私的労働」との異なりはどこにあるのか。念のために一言すれば、ここで「社会的分業は商品生産の実存条件であるが、商品生産は社会的分業の実存条件ではない」と説かれることの証拠を、もし古インドの共同体や工場内の所与に求めるならば誤りを犯すことになる。例えば一台の自動車を生産するとして。必要なすべての部品を一社内で作り出す事例から市場で調達する事例まで、そこにあらゆるバリエーションが想定され得るように、いわゆる「事実」の中に労働分割の二類を隔てる指標は見出されない。求められているのは両者を分かつ論理である。

前パラグラフでわれわれは仮象に達した。つまり「有は仮象である」(p.12) が、では仮象とは何であろうか。例えば、10 億光年の距離にある超新星爆発を観測するとする。このとき観測者が直接観測するのは爆発の輝き Schein であるが、その「今・ここ」に観測される輝きが 10 億光年の時空を隔てた爆発の輝きであることを観測者は知っている。つまり輝きは仮象であるが、その仮象であることすなわち仮象 (として) の有 [存在] は、「全く有が止揚されているという点、有の空無性 [無であるという性格] Nichtigkeit の点でのみあり得る [存立する] bestehen」(同)。だが有が無であるのは有が本質でないからであり、それゆえ「有の空無性 [有が無であること]」を有は「本質の中でもつ」(同)、すなわち仮象は本質を離れては außer dem Wesen 存在しない。つまり「仮象は否定的なもの (空なもの・本質でないもの) として措定されているところの否定的なもの das Negative gesetzt als Negatives である」(同)。

だが仮象は「有の領域からまだ残っている唯一の残り物 [残り物の全体] der ganze Rest, der noch von der Sphäre des Sein übriggeblieben ist」(同) として「なお本質から独立した [依存しない] 直接的な面 noch eine vom Wesen unabhängige unmittelbare Seite をもち、本質の他者一般であるような観を呈する scheinen」(同) —— つまり「仮象-本質」関係の一項が仮象であり、仮象が「有の残り物」たる所以である。これに対して後述する (十一パラグラフ) 被措定有は、「有」ではあってもすでに「有の残り物」と見ることはできない ——。ただし他者といってもそれは空無であるから、そこには他者の二契機、定有・否定有 Nichtdasein のうち「全くの [純粋な] rein 否定有の契機だけが残されている」(同)。かくして仮象は「直接的な否定有」(同) すなわち「他者に対する関係の中でのみ nur in der Beziehung auf Anderes」(同) 存在するから、それは「自己の否定の中にあるところの非自立的な存在 das Unselbständige である」(同)。

それゆえ（自己の否定という以上）仮象は「反省された直接態 reflektierte Unmittelbarkeit」（同）であり、すなわち「自己の否定をその媒介としてのみ nur vermittelt 存在（自らが否定的なものであることを条件に存在）」（同）し、「その媒介に対立しては ihrer Vermittlung gegenüber — それだけを切り離して把握すれば —、むしろ単に nur 否定有の直接態（空なもの）という空な leer 規定にほかならない」（p.13）、そのような直接態である。

さて「さまざまな種類の使用価値または商品体」がそれとして存在するのは「多様な、属、種、科、亜種、変種を異にする有用的労働の総体 — 社会的分業」においてであって、つまり多様な有用的労働のそれぞれは社会的分業（本質）を「離れては存在しない」ところの仮象である。けれども有用的労働は「有の唯一の残り物」として「独立した直接的な面」をもち、すなわち「自立的な、互いに独立の、私的労働」である。それらは一見相互に「他者一般であるような観を呈する」が、その生産物が「交換されることによって媒介され」、「互いに商品として相対する」ように、実は私的労働も「自己の否定の中にあるところの非自立的な存在であり」 — 私的労働の生産物は交換によって当の生産者の下にはない（否定有） —、つまり「反省された直接態」として「（個別的生産物を交換するという）自己の否定をその媒介とすることによってのみ存在する」、この意味で「社会的分業は商品生産の実存条件である」。他方共同体および工場において分割される労働は「交換されることによって媒介されているのではない」 — 「媒介に対立して」いる — から「単に否定有の直接態という空な規定にほかなら」ず、それゆえ私的労働として存在してはいない（空である）。その生産物もまた商品として存在してはいない。

なお多様な有用的労働のそれぞれは「仮象の多様な mannigfaltig 規定」（p.13）であり、「直接的で、有的な、互に他者である」（同）ところの無関心態 Gleichgültigkeit である。それらは「仮象自身によって措定されたものではな」く（同）、「所与の gegeben」（p.14）直接態である — 「（物の有用性の）さまざまな面と、それゆえ物のいろいろな使用の仕方とを発見することは、歴史的な行為である」（第一節三パラグラフ） —。

（6） p.72 ⇔ III 「B 仮象」の [2. 仮象の本性 — 仮象と本質] p.14~16

したがって、われわれは次のことを見てきた Man hat also gesehen. — どの商品の使用価値にも一定の合目的な生産的活動または有用的労働 eine bestimmte zweckmäßig productive Tätigkeit oder nützliche Arbeit が含まれている [に納まっている] stecken. 諸使用価値は、質的に異なる有用的労働がそれらに含まれていなければ、商品として相対することはできない Gebrauchswerte können sich nicht als Waren gegenüber treten, wenn nicht qualitative verschiedene nützliche Arbeiten in ihnen stecken. その生産物が一般的に商品という形態 Form をとっている社会においては、すなわち商品生産者たちの社会においては、自立した selbständig 生産者たちの私



事 Privatgeschäft として互いに独立に unabhängig 営まれる有用的労働のこうした質的区別 qualitative Unterschied が、一つの多岐的な体制 ein vielgliedriges System に、すなわち社会的分業に、発展する sich entwickeln。

本パラグラフは一見先行する三つのパラグラフの反復にすぎないかに思われる。実際マルクスも現在完了で記している。だがそうではない。マルクスは使用価値生産の「一定の合目的な生産的活動」であることを説くが、そのためには仮象（私的労働）と本質（社会的分業）との連関がなお考察されねばならない。すなわち「仮象が本質と（悟性的に）区別されているかぎり insofern der Schein vom Wesen unterschieden ist（換言して仮象が本質に対する無関心であるかぎり）、仮象について、それが自己を止揚して本質の中へ還帰する zurückgehen ということは示され得ない」（p. 14）。だから有用的労働の合目的であることを説くために「ここに明らかにしなければならない唯一の点は、仮象を本質と区別するところの諸規定が本質自身の規定であるということ、およびこの本質の規定態、すなわち仮象は本質そのものの中では im Wesen selbst 止揚されているということ」（同）、これである。

仮象が仮象（仮-象かつ／または仮-象）である以上、「仮象を形成しているところのものは非有（仮-象）の直接態（仮-象）である」（同）が、この非有（非-有）は「本質（非-有）のそれ自身における〔顕在的になっている〕an ihm selbst 否定態（非-有）」（同）に他ならない。つまり有は本質の中での〔本質においては〕im Wesen 非有であり、「有の空無性〔無であるという性格、すなわち有が無である〕は、即自的には〔本来的には〕本質そのものの否定的本性 negative Natur である」（同）。それゆえ、この非有が含むところの直接態または無関心態は本質自身の〔固有の〕eigen 絶対的な即自有である——「即自有」とは「自分の他の物への関係に対立する自己関係としての有であり、自分の不等性に対立する自己同等性としての有 Sein, als Beziehung auf sich gegen seine Beziehung auf Anderes, als Gleichheit mit sich gegen seine Ungleichheit」（I p. 133 第二章定有「B 有限性」）である——。だから「本質の否定態は本質の自己同等性〔自己自身との相等性〕、または本質の単純な〔単一な〕直接態であり、無関心態 seine Gleichheit mit sich selbst oder seine einfache Unmittelbarkeit und Gleichgültigkeit である」（同）。本質がその無限の否定態の中に an seiner unendlichen Negativität このような自己同等性（即自有）をもつ haben かぎり——「否定態」とは「自分の他の物」（上揚）すなわち向他有 Sein-für-Anderes である。本質の否定態が自己自身（本質）なのであるから、それは無限の否定態（規定態）である。かくして即自有が向他有から区別されている——、有は本質の中で自己を維持〔保持〕している sich erhalten（つまり有である）。この点において「本質自身が有である」（p. 15）。だから（仮象であるという）規定態が仮象の中で am Scheine 本質に対して〔対立して〕もつところの直接態（非-有）は、本質自身の〔固有の〕直接態（有）にほかならない——以上仮-象の面が説かれた——。ただし「それは有的な直接態なのではなくて、全く〔端的に〕schlechthin 媒介された（「本質-仮象」

という媒介)、すなわち(本質ではないと)反省された直接態 reflektierte Unmittelbarkeit」(同)であつて、この直接態が仮象なのである。すなわち、それは有としての有 — すなわち有そのもの、向他有から切り離されて把握された即自有 — ではなくて、媒介に対して[対立して]あるところの gegen die Vermittlung 単なる nur 有の規定態としての有であり、「契機 Moment としての有」(同)である — 仮象は「本質-仮象」の媒介関係においてはじて仮象であり、媒介関係の一項として媒介関係に対立している。それは「非-有」として有の規定態であり、この規定態において有は「非有である有」(すなわち「有は非有である」)であるから、仮象は契機としての有である。以上仮-象の面が説かれた —。

「仮象(私的労働)を形成しているところのものは非有の直接態」であるから、それは「本質(社会的分業)自身の絶対的な即自有」である。そして私的労働が即自有[潜在的 an sich な存在]である以上、それは「(顕在化 an ihm に向かうところの)一定の合目的な生産的活動または有用的労働」である — an sich と an ihm についてはハイデッガーの読みを参照(「ヘーゲルの『経験』概念」p.147 以下理想社版選集2巻) —。ただし私的労働(仮象)は本質の「無限の否定態」として「全く媒介された、反省された直接態」であるから、それは「社会的分業-私的分業」という「媒介に対して」あるところの「契機としての有」である。

この二契機すなわち「空無性であるがしかし存立 Bestehen としての空無性と — 仮象は「有の空無性という点でのみある bestehen」(前掲) —、有ではあるがしかし契機としての有」(p.15)、換言して「仮象の二契機を形成しているところの即自有的な否定態と反省した直接態」(同)とは、それゆえ本質それ自身の二つの契機である。すなわち有の仮象が本質の中に[本質のもとで] am Wesen 存在する[現存する]のでもなければ nicht vorhanden、また本質の仮象が有の中に[有のもとで] am Sein 存在するのでもない。本質の中にあるところの[本質における] im Wesen 仮象は或る他者の仮象ではない。「仮象は即自的な仮象であり、本質自身の仮象である」(同) — am Wesen と im Wesen について、寺澤氏は、前者は対立しているのではないが区別されたものとして並立の関係にあり、後者は「内にある」したがって「契機としてのみある」とする(以文社版 p.289 訳者注15) —。つまり「仮象は有の規定態(非有すなわち有の空無性)の中にあるところの本質そのものである」(同)。本質が仮象をもつのは、本質がそれ自身の中で規定され、そのために自己の絶対的統一から区別されることによる。けれども「この規定態は同様に全くそれ自身において[顕在的に] an ihr selbst 止揚されている。なぜなら、本質は自立的なもの das Selbständige であり、本質自身であるところの自己の否定によって自己を媒介するものとして有る(向自有)」(同)からである。それゆえに、本質は絶対的否定態と直接態との同一的な統一 identische Einheit である。一方の否定態は即-自的な否定態である。すなわち「否定態の自己への関係」(同)である。ゆえに(他ならぬ自己への関係であるから)否定態は即自的には[本来的には]他方の直接態である。けれども「否定態は自己への否定的関係[自己を否定する関係]であり、自己自身を反撥する否定作用[つきはなす働きをする否定する運動]abstoßendes Negieren ihrer selbst

であるから、この即自有的な直接態は否定的なもの（したがって媒介されたもの）であり、或いは直接態に対して「対立するものとして」規定されているものである so ist die an sich seiende Unmittelbarkeit das Negative oder Bestimmte gegen sie」（同）。しかし、この規定態は、それ自身絶対的否定態であり、また規定するもの Bestimmen として、そのまま「直接に」自己自身の止揚、すなわち（否定態の止揚であるから）自己への還帰であるような規定作用「規定する運動」である。

仮象である「質的に異なる有用的労働」は「有の規定態の中にあるところの本質そのもの」であり、或いは本質自身の規定態である。それは「それ自身であるところの自己の否定によって自己を媒介しており」、すなわち「それ自身絶対的否定態」として他の「質的に異なる有用的労働」と「相対する」。そして「諸使用価値」も絶対的否定態としての「質的に異なる有用的労働がそれらに含まれている」ことで、「商品として相対することができる」——前節で所与であった商品の交換関係が、仮象論（即自的反省論）において捉え返された——。それゆえ（相対する）有用的労働はまた「規定するものとして、そのまま自己自身の止揚、すなわち自己への還帰であるような規定作用「規定する運動すなわち本質」である」——仮象が「本質そのもの」でありまた運動であることで、ここに有用的労働が「本質（社会的分業）自身の仮象」として把握された——。

仮象は否定的なものである。しかし、この否定的なものは有をもっているが、これを一つの他者の中で、すなわち自己の否定の中でもつところの否定的なものである。ゆえに「仮象は、それ自身「顕在的に」止揚されたものであり、空なものである nichtig ような非自立態 Unselbständigkeit である」（p.16）。この意味で、仮象は（空でない）自己に復帰するところの否定的なものであり、それ自身において「顕在的に」非自立的なものとしての非自立的なものである。否定的なものまたは非自立態の（否定的ないし非自立的でないところの）自己へのこの関係が、仮象の直接態である。したがって、この関係（すなわち、この意味の直接態）は、否定的なものそのもの（本質）とは一つの別のもの「他者」ein Anderes である。この（本質-仮象）関係は否定的なもの（仮象）が自己（本質）に対立するところの規定態であり、換言すれば、否定的なものに対する否定である——「本質-仮象」において、仮象の直接態は本質に対立して「本質である仮象」の規定態である。以上で仮象と本質との区別が説かれた——。けれども「否定的なものに対する否定（すなわち「本質である仮象」。仮象は否定的なものであり、その「本質である」という規定は否定である）とは、ただ自己にのみ関係するところの否定態 die sich nur auf sich beziehende Negativität であり、すなわち規定態そのものの絶対的止揚「絶対的に止揚する運動」absolutes Aufheben である」（同）——仮象が止揚されることでその本質との同一性が回復された——。だから（止揚された規定態であるから）本質の中における仮象であるところの規定態は（言わば本質→仮象→本質→…の）無限的な規定態である。（つまり有限でない・否定されない規定態であるから）それは「全く「単なる」nur 自己と合致する mit sich zusammengehen 否定的なもの」（同）にほかならない。（自己と合致する否定態である）ゆえに、この規定態はこういう規定態として自立態 Selbständigkeit で

あって、したがって規定されていないような規定態（本質）である — 本質の中では「すべての規定的なもの」と有形的なものが否定されている（III p. 4 第二巻本質論）。以上より「仮象は本質である」ことが明らかにされた —。逆に、自立態は自己に関係する直接態として、同様に全くの[端的に] 規定態であり、（自己に関係するのだから直接態は）契機であって、ただ「自己に関係する否定態としてのみある」（p. 16） — 以上より「本質は仮象である」ことが明らかにされた —。このような直接態と同一のものである *identisch* ところの否定態、したがってまた否定態と同一のものであるところの直接態が、本質（向自有）である。それゆえに、仮象は本質そのものである。ただしそれは「単に本質の契機にすぎないような規定態の中にある *in einer Bestimmtheit* ところの本質」（同）である。こうして本質は、自己の自己自身に中における映現する [仮象する] 運動 *das Scheinen seiner in sich selbst* である（同）。

「商品生産者たちの社会においては」、仮象としての有形的労働はその有を「一つの他者」 — 後述する「一つの多岐的な体制」 — の中にもつところの「非自立態」それゆえ媒介されたものであるが、ただしそれは自己へと関係する「直接態」すなわち「否定的なもの（媒介されたもの）」が（他ならぬ）自己に対立するところの規定態」として自己関係であり、それゆえ「自立した生産者たちの私事として互いに独立に営まれる」。つまり個々の「私事」は「本質の中における仮象であるところの規定態」であり、すなわち自立態・「規定されていないような規定態（本質）」として限定＝否定されない「一つの多岐的な体制」である — 『資本論』における「仮象は本質である」の面 —。「逆に」この「一つの多岐的な体制」を見れば、それは「有形的労働のこうした質的区別（直接態）」がその「契機」であるところの「社会的分業」である — 同じく「本質は仮象である」の面 —。

(7) p. 72 ⇔ III 「B 仮象」の [3. 仮象の反省への移行] p. 16~17

ところで、上着にとっては、それが裁縫師によって着られるか、それとも裁縫師の顧客によって着られるかは、どうでもよいことである *gleichgültig*。どちらの場合でも、上着は使用価値として作用する *wirken*。同じように、上着とそれを生産する労働との関係 *Verhältnis* は、裁縫労働が特殊な職業 *besondere Profession* となり *werden*、社会的分業の自立的な一分肢 *selbstständiges Glied* となることによって、それ自体としては *an und für sich* 変わる *verändern* ことはない。人間は、衣服を着る必要に迫られたところでは *wo ihn das Kleidungsbedürfnis zwingen*、だれかある人が裁縫師になるまえに、すでに何千年にわたって裁縫労働を行なってきた。しかし、上着やリンネルのような天然自然には存在しない *nicht von Natur vorhanden* 素材の富 *stofflicher Reichtum* のあらゆる要素の定在 [定有] は、特殊な自然素材 *Naturstoff* を特殊な人間的欲求に適合させるある一つの特殊な [特有の] *speziell* 合目的な生産的活動によって、つねに媒介され *vermittelt* なければならなかった。だから、労働は、使用価値の形成者として

は、有用的労働としては、あらゆる社会形態 Gesellschaftsformen から独立した unabhängig、人間の一事存条件 [一つの事存条件] eine Existenzbedingung であり、人間と自然との物質代謝 Stoffwechsel を、それゆえ人間的生活を、媒介する vermitteln 永遠の自然必然性 ewige Naturnotwendigkeit である。

上着が「使用価値として作用する」とき、それが誰によって着られるか（誰の上着が生じるか entstehen）は「上着にとっては……どうでもよいことである」。なぜか。顧客が上着を着る（有）とき裁縫師は着ない（非有）ように、「有（有用物）の領域においては in der Sphäre des Seins、直接的存在 [直接的なもの]（顧客の上着）としての有に対立して同様に直接的存在（裁縫師の上着）としての非有（無）が生起 entstehen」（p.16）し、かく生起するところの「両者（有と無）の真理」（I p.79 第一章有「C成」）が「なる [成] werden」である。それは「有と無との非分離態 Ungetrenntheit」（同 p.112）であるから、この意味で成の統一の中には「有も無もない」（同）。つまり上着にとっては交換価値の素材的な担い手（使用価値）であっても、有用物それ自体としては上着に成ることが問題であり、誰によって着られるか（有・非有）は（その非分離ゆえに）どうでもよいこと、問うところではない。

次にマルクスは「同じように」と続ける。だが何が「同じ」なのだろうか。前パラグラフまでの考察で労働（有用的労働）は仮象としてその本質と対立している。つまり「本質の領域」（p.17）である。しかし、その「仮象は有の残り物」（同）であるから、このかぎり（「有の領域」にあるかぎり）有用的労働（例えば裁縫労働）は「特殊な職業となり、社会的分業の自立的な一分肢となる」。つまりここでも考察は「有の領域」でのことであり、「同じように」は、考察の対象が物（上着）から労働に移っても差し当たり有の領域に留まること、本質の領域に進むのはその後であることを言う言葉である。そこで次のように言える。裁縫労働は成であるから、この統一の中には「有も無もない」、すなわち誰が上着を生産したか（生産者がAであるかBであるか）は問われない。誰が裁縫しようが上着は上着として「それ自体としては変わることはない」から、「人間は、衣服を着る必要に迫られたところでは、だれかある人が裁縫師になるまえに、すでに何千年にわたって裁縫労働を行なってきた」のである。

けれども、仮象と本質と、この両者に区別がある bestehen のは「本質がまず一つの直接的な本質（非本質的存在に対する本質的存在）と見られて、その真の相において [本来的にあるようには] an sich 見られなかったこと、換言して純粋な媒介 reine Vermittlung としてのまたは絶対的否定態としての直接態、そのような直接態として見られなかったこと、そのためにほかならない」（p.17）から、労働（本質）の「真の相」の探究はさらに先へ進行する。「（有から出て来た）最初の直接態は（本質的存在として）単に直接態の規定態にすぎない」（同）——「非本質的存在でない本質（的存在）」すなわち

非本質的存在に対立するところの、関係の一項にすぎない本質——。それゆえ労働の真相が明らかにされるためには、換言して「本質のこのような規定態の止揚が成り立つためには、次の点を明らかにすればよい」(同)。非本質的存在は仮象にすぎず、本質がこの「仮象をむしろ自己における無限の運動 unendliche Bewegung in sich として自己自身の中に含んでいるということ、そしてこの自己の中における無限の運動は本質の直接態(仮象)を否定態(本質である仮象)として規定し、またその否定態(本質)を直接態(仮象である本質)として規定する bestimmen のであって、その意味で本質の自己自身の中における映現する[仮象する]運動であること」(同)、これである。そしてこうした「自己運動 Selbstbewegung の中にあるところの本質は、すなわち反省 Reflexion である」(同)—— 仮象が「仮象-本質」関係の一項であるのに対し、反省は自己運動する「S-P」関係そのものであり、その関係項は反省から独立して存在するのではない(独立した有ではない)——。かくして本質のこの媒介の働きをさらに詳しく考察することが反省論の課題である。

そこで労働を「純粋な媒介」として見ると、それは「天然自然には存在しない素材的富のあらゆる要素(すなわち有用物であり、資本主義的生産様式が支配している社会においては商品である(第一節一パラグラフ))を「定在」せしめるところの媒介する活動、すなわち「特殊な自然素材を特殊な人間的欲求に適合させるある一つの特有の合目的な生産的活動」(有用的労働)であり、それは「本質の自己自身の中における映現する運動」として「絶対的否定態」の「自己運動」である。それは「仮象である本質」であるゆえに「あらゆる社会形態から独立した、一つの実存条件」であり、「自己の中における無限の運動」として「永遠の自然必然性である」—— 他ならぬ「自己の中」での運動ゆえに偶然性を免れており、本性的かつ必然的である——。

媒介する運動(反省)としての特有の労働が、言わば定有以前の「天然自然」を規定して「自然素材 Naturstoff=素材的富」として定有せしめるという把握は、価値論における Form と Stoff—— 延いては Form;forme と Substance;substance —— との関係を理解する上で要点となる。そこでさらに問われるのは、労働そのものが「特有に合目的」であること、換言して労働が形態であることの把握であるが、そのためには媒介する運動としての労働の本性が明かされなければならない。

#### 四 労働の反省論

(8) p. 73 ⇔ III 第一章 仮象「C 反省」の [1. 反省の本性] p. 17~18

使用価値である上着、リンネルなど、要するに商品体は、二つの要素の、すなわち自然素材と労働との、結合物 Verbindung である。上着、リンネルなどに含まれているすべての異なった有用的労働の総和 Gesamtsumme を取り去れば abziehen、人間の関与なしに ohne Zutun des Menschen 天然に存在する von Natur vorhanden 物質的基体 ein materielles Substrat がつねに stets

残る。人間は、彼の生産において、自然そのものと同じように wie die Natur selbst ふるまう verfahren ことができるだけ nur である。すなわち、素材の形態 Formen der Stoffe を変える ändern ことができるだけである。それだけではない。形態を変えるこの労働そのものにおいても、人間は絶えず自然力に支えられている unterstützt。したがって、労働は、それによって生産される使用価値の、素材的富の、唯一の源泉ではない。ウィリアム・ペティが言うように、労働は素材的富の父であり、土地はその母である。

『大論理学』で「C反省」が始まる。ヘーゲルははじめに反省（反省的運動 reflektierende Bewegung）とは何かを論じた後、措定的反省・外的反省・規定的反省の三段階を経て有の止揚される過程を説くが—— 仮象は「有の残り物」（前パラグラフ）であった——、それに先立っては反省と仮象との異なりが説かれる。仮象の反省への移行—— 反省は「本質の自己自身の中における仮象する運動である」（前パラグラフ）——により「仮象は反省と同一のもの」（p.17）であるが、しかしそれはなお有的なものとして「直接的な（有的な）反省としての反省」（同）である。これに対して、反省は「自己の中に復帰したところの、……その直接態を離脱した entfremdet ところの仮象」（同）である。ところで「サルでさえ反省する」と言われるように、日本語の「反省」には人間特有の精神的営みというニュアンスがあるが、反省論の考察に際してかかるニュアンスは一先ず除かれるべきである。Reflexion の訳語に「反射・反照」の当てられることもあるように、事柄のその関係（の第一次）性における把握が反省なのであって、そうであればこそ仮象は「直接的な反省」である。

さて使用価値ないし素材的富と労働との関係を説く本パラグラフは、直ちに『精神現象学』緒論 Einleitung の一節を思い起こさせる。それは「自体的に在るもの dasjenige, was an sich ist を、認識によって、意識のものとしようとする企てが、その概念から言って矛盾しており、認識と絶対者との間には、両者を端的に分ける限界が在る」（上巻 p.100）という真理認識を懐疑する主張について、ヘーゲルがその懐疑の理由を代弁する箇所である。

なるほど、われわれが道具を通じ絶対者についてもつ表象のうちで、道具に帰せられている部分を結果から差し引けば abziehen、真理を純粹のままにしておく das Wahre rein zu erhalten ことができる、という理由で、道具のはたらき方 Wirkungsweise を知っていれば、いま言ったような不都合（あることへの道具の適用 die Anwendung eines Werkzeugs auf eine Sache は、そのことを「それ自身で在る通り wie sie für sich ist」にしておかず別形に変えてしまう）を取り除け得るように思われる scheinen。けれども、こういうふうにと訂正してみても、実際には、われわれは初めにいたところに連れ戻されるだけであろう。道具によって形を与えられた物から、道具が付け加えたものをもう一度取り去るならば、物は、—— この場合は絶対者——われわれにとつては、また、そういう余計な努力が払われる前とちょうど同じであることになる。（同 p.101）

かく代弁したヘーゲルは、次いでその主張の悟性的な前提を剔抉し批判する。

(それは) 絶対者が一方の側に在り、他方の側に認識作用がそれだけで für sich、絶対者から離れていながら getrennt、しかも、実在的なもの etwas Reelles として在るということを前提している。言いかえると、そのために、絶対者の外に、またもちろん真理の外に在りながら、しかも真であるような認識作用を前提している voraussetzen。(同 p. 103)

そして「本質は反省である」(p. 17) と言われる反省運動こそは、悟性的把握の止揚である。なぜなら労働が「純粹な媒介」(前パラグラフ) である今、反省は「自己自身の中にとどまるところの生成と移行との運動 Bewegung des Werdens und Übergehens であつて、それにおいては区別された存在は全く schlechthin それ自身否定的なものとして、仮象として規定されているにすぎない」(p. 17) からである。

それゆえ「商品体は、二つの要素の、すなわち自然素材と労働との、結合物である」と説かれるとき、その二つの要素を自然素材＝「あること Sache」・労働＝「道具」と把握した上で、それらの「結合物(物)」が商品体なのだとして解してはなるまい。かく解された「結合(あることへの道具の適用)」は「有の場合の成」(同)における「他者 Anderes への関係」(p. 18) であつて——「絶対者が一方の側に在り、他方の側に認識作用がそれだけで、絶対者から離れていながら、しかも、実在的なものとして在る」。なおヘーゲルはライプニッツの单子 Monade について次のように説いている。「単子は、それ自身の中から、その表象 Vorstellung を展開する。けれども、単子は生産力または結合力 die erzeugende und verbindende Kraft ではなく、諸々の表象は……互に無関心で、直接的であつて、したがって単子自身に対しても無関心である」(III p. 14 「B 仮象」) ——、「自己への関係」(同)たる反省運動はそこにはないからである。また、「すべての異なった有形的労働の総和を取り去れば、人間の関与なしに天然に存在する物質的基体がつねに残る」という把握も反省の立場からのものではない。その「物質的基体」は vorhanden な —— すなわち「人間の関与なしに」、それ自身で[それだけで] für sich 在るところの —— 「有的な基体 ein seiendes Substrat」(p. 18) に他ならず、換言すれば「われわれが道具を通じ絶対者についてもつ表象のうちで、道具に帰せられている部分を結果から差し引けば、真理を純粹のままにしておくことができる」と悟性的説くところの「真理」に代わるものではないからである。だからマルクスは直続する一文でこの悟性的把握を退ける。

すなわち労働を反省と把握すれば、「人間は、彼の生産において、自然そのものと同じようにふるまい、(自然) 素材の形態を変えることができるだけである」。なぜなら反省運動(労働)は「否定それ自身 Negation an sich としての他者」(p. 18) であり、この「否定は自己に関係する否定 sich auch sich beziehende Negation という意味でのみ nur 有 ein Sein をもっている haben」(同) からである —— 反省運動とは例えば A を反省する運動であるから、そこで反省された A は否定されている。つまり、否定された A は「(A の) 否定それ自身としての他者」であり、それは「A でない」として「自己に関係する否定」である。労働も、「自



然そのものと同じようにふるまい、自然素材の形態を変えることができるだけである」とき、それは「(自然そのものの)否定それ自身としての他者」であり、「(否定された)自然」として「自己に関する否定(する運動)」である——。「それだけではない」。この自己関係は否定の否定(否定が否定へ関係する)であるから、「否定は否定として存在 vorhanden」(同)し(「否定が否定へ関係する」以上、関係項として否定が存在する)、すなわち「自己の否定態 Negiertsein (それが否定されてあること・Aでない)の中に自己の有をもつ(非有が有である)ような否定として、仮象として存在」(同)し、それゆえ他者は「この場合には否定または限界を伴うところの有なのではなくて、否定を伴うところの否定」(同)である。そしてこの他者に対立する「第一のもの、すなわち直接的なもの、または有は、単にこのような否定の自己との同等性そのもの diese Gleichheit selbst der Negation mit sich、すなわち否定された否定、絶対的否定態(本質)にすぎない」(同)。そして自然素材の「形態を変えるこの労働そのもの」は他者(「否定または限界を伴うところの有なのではなくて、否定を伴うところの否定」)であるから、「人間は絶えず」それに対立する絶対的否定態すなわち「自然力に支えられている」。

(9) p. 74 ↔ III 「C反省」の [2. 無から無への運動としての反省] p. 18

そこで、こんどは、使用対象であるかぎりでの商品から、商品価値に移ろう übergehen。

このように労働は「有の場合の成」(前パラグラフ)と異なるところの「本質の場合の成、すなわち本質的反省的運動」(p. 18)である。この運動においては「移行または成は、その移行の中で自己を止揚する」(同)から、それは「無から無への運動 Bewegung von Nichts zu Nichts」であり、またそれによって自己自身に戻る zu sich selbst zurück ところの運動」(p. 18)である——Aを反省する運動においてAは否定されて-Aであり、Aは-Aに移行する(A→-A)。つまりAは否定的なもの(無)であり、-A (Aでない)は「自己に関する否定」(前パラグラフ)として無である。かくして反省運動は「無から無への運動(無→無)」であるが、このときその移行(→)は止揚されて、反省は「自己自身に戻るところの運動」である。ただしAは反省運動においてAなのであって、運動以前にAであると捉えるならば、「無から無への運動」は理解されまいだろう——。つまりこの移行の中に現れてくる「他者は或る有の非有ではなくて、無の無 Nichts eines Nichts」(同)であり、このような無の否定であるということが有を形成する ausmachen。かくして「有は、ただ無の無への運動としてのみあり、その意味で有は本質である」(同)が——運動以前にAであることの否定——、本質はこの運動を自己の中にもつ haben in sich のでなく、この運動そのものが「絶対的仮象そのもの absoluter Schein selbst」として純粋な否定態」(同)であり、それはすなわち「自己以外に自分が否定する何ものをももたず、ただ自己の否定的なものそのものを否定するにすぎず、しかもこの自己の否定的なものが、またこの否定作用の中のみあるという否定態」(同)である。

労働が「無から無への運動」（自然そのもの→形態を変えた自然＝使用価値）であるとき、労働によって生産されてこの移行の中に現れてくる有（商品）は「無の無」すなわち本質である。それは「絶対的仮象そのものとして純粋な否定態」すなわち「商品価値」である——商品価値に達した前節最終パラグラフにおいて、「有は、有の止揚によって自分と一つとなった単純な有としての有（すなわち本質）となった」（II p. 288）ことを想起されたい。そしてかかる本質は「無規定的な本質」（一パラグラフ）すなわち「純粋な否定態」であった——。そこで考察は「使用対象であるかぎりの商品から、商品価値に移る」。

(10) p. 74 ⇔ III 「C反省」の「1 措定的反省」の「I 反省の一般的性格」p. 19～20

(α) われわれの想定によれば、上着はリンネルの二倍の価値をもっている。もっともこれは量的な区別 ein quantativer Unterschied にすぎず、この区別はさしあたり zunächst まだわれわれの問題ではない。そこで、われわれは、一着の上着の価値が一〇エレのリンネルの価値の二倍であれば、二〇エレのリンネルは一着の上着と同じ価値の大きさ Wertgröße をもつということを思い出そう。価値としては、上着とリンネルとは同じ実体 Substanz をもつ物であり、同種の労働の客観的表現である。ところが、裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる労働である。とはいえ、ある社会状態においては、同じ人間が裁縫労働と織布労働とをかわるがわる abwechselnd 行ない、したがって、この二つの異なる労働様式 Arbeitsweise は同じ個人の労働の諸変形にすぎず、まだ異なる諸個人の特殊な固定的な機能にはなっていないことがある。それは、ちょうど、わが裁縫師がきょう仕立てる上着とあす仕立てるズボンとが同じ個人的労働の変化 Variationen を前提する voraussetzen にすぎないのとまったく同じである。さらに、一見してわかるように、われわれの資本主義社会においては、労働需要の方向が変化するにつれて、それに応じて、一定部分の人間の労働が、あるときは裁縫労働の形態 Form で、あるときは織布労働の形態で、かわるがわる供給されている。労働のこの形態変換 [形態の交替] Formwechsel は、摩擦なしには行なわれなければならないが、ともかく行なわれなければならない。(β) 生産的活動の規定性、したがって労働の有用的性格を度外視すれば absehen、労働に残る bleiben のは、それが人間的労働力の支出 Verausgabung menschlicher Arbeitskraft であるということである。裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる生産的活動であるにもかかわらず、……(中略)……ともに、人間的労働である。それらは、人間的労働力を支出する二つの異なった形態にすぎない。確かに、人間的労働そのものは、それがあれこれの形態で支出されるためには、多少とも発達していなければならない。しかし、商品の価値は、人間的労働自体を、人間的労働一般の支出を、表わしている。ところで、ブルジョア社会では、将軍なり銀行家なりは大きな役割を演じ、これに対して人間自体はごくみすばらしい役割を演じているが、この場合の人間の労働もそのとおりである。

それは、平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力 einfache Arbeitskraft の支出である。(γ) 確かに、単純な平均労働 einfache Durchschnittsarbeit そのものは、国を異にし文化史上の時代を異にすれば、その性格を変えるが wechseln、現に存在する一つの社会では in einer vorhandenen Gesellschaft、与えられている gegeben。より複雑な労働は、単純労働の何乗かされたもの、またはむしろ何倍かされたものとしてのみ通用し gelten、そのために、より小さい分量 Quantum の複雑労働がより大きい分量の単純労働に等しい gleich ことになる。この還元 Reduktion が絶えず行なわれていることは、経験が示している。ある商品をもっとも複雑な労働の生産物であるかもしれないが、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置する gleichsetzen のであり、したがって、それ自身、一定分量 ein bestimmtes Quantum の単純労働を表わすにすぎない。さまざまな種類の労働 verschiedene Arbeitsarten がその度量単位 Maßeinheit である単純労働に還元されるさまざまな比率 Proportion は、生産者たちの背後で hinter dem Rücken 一つの社会的過程によって確定され festgesetzt、したがって生産者たちにとっては慣習 Herkommen によって与えられているかのように見える scheinen。簡単にするために、以下ではどんな種類の労働力をも直接に単純な労働力とみなすが、それは、還元の労をはぶくためにほかならない。(ギリシア文字および下線は引用者)

『大論理学』は「措定的反省 die setzende Reflexion」を説く。反省運動が有の止揚であることは上述したが(ハパラグラフ)、その第一段階の措定的反省では、有的な直接態——それは「移行的で、単に相対的な、他者との関係の中にある」(Ⅲp. 27 註釈)——が反省されて「直接態ではないところのものであるような直接態」(p. 20)として捉え返される——なぜなら反省は「否定的なものの自己自身との直接的な合致」(同)だからである——。それゆえ直接態の外なる有的な区別(本質と仮象)はその内に措定されて、ここに「絶対的な自己媒介」(Ⅲp. 32 第二章本質態または反省規定)たる本質への一步が始まる。

対応的に『資本論』本パラグラフは労働を「単純な [単一な] 労働」として把握するが、それに先立っては留意しておくべき点がある。

第一は実線下線部の第一節との類似であり、後者は次のようなものであった。

労働生産物の有的な性格とともに、労働生産物に表わされている労働の有的な性格も消えうせ verschwinden、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的形態 die verschiedenen konkreten Formen dieser Arbeiten も消えうせ、これらの労働は、もはや、互いに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間的労働 gleiche menschliche Arbeit、すなわち抽象的人間労働に還元されている。／そこで、これらの労働生産物に残っているもの Residuum を考察しよう。……これらの物が表わしているのは、もはやただ、それらの生産に人間的労働力が支

出されており、人間的労働が堆積されているということだけである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値 — 商品価値である。(第一節十・十一パラグラフ)

してみれば本パラグラフは二要因論の単なる反復にすぎないのであるか、当然この点が問われるだろう。

第二。点線下線部は初版二要因論の次の叙述とほぼ同一である。

価値としては、諸商品は結晶した労働にほかならない。この労働そのものの尺度単位 *Maßeinheit* は単純な平均労働であって、この単純な平均労働の性格は、国のちがいや文化圏のちがいに応じてちがう *wechseln* ことは確かだが、ある現存の社会では与えられている。より複雑な労働は、単純な労働の累乗されたもの、あるいはむしろ数倍されたものとしか見なされず、したがって、たとえば、より少量の複雑労働は、より多量の単純労働に等しいわけである。こうした換算 *Reduktion* がどのように規制されているかは、ここではどうでもよい。こうした換算が絶えず行なわれていることは、経験の示すとおりである。ある商品は、きわめて複雑な労働の生産物であるかもしれない、この商品の価値は、この商品を単純労働の生産物に等置するのであって、それゆえに、この商品の価値自身は一定量の単純労働しか表わしていない。(初版 p. 21)

この叙述は第二版での第一節十三パラグラフの前に位置しており、つまり初版での二要因論の叙述が、第二版では労働の二重性論として登場するのである — 実際は両版は章節立てを異にし、二要因論・二重性論とも初版では独立の節を構成していない — 。ただし第二版でこの叙述に直続する「さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は云々」は初版でも二重性論に位置し、要するに第二版二重性論では初版二重性論の次の叙述が削除され、その代わりに初版二要因論の一部が転用されているのである。

(ところで、ブルジョア社会では……単純な労働力の支出である。) たとえば農僕の労働力は、単純な労働、すなわち、さらに一段と渦巻き模様で飾り立てられることのない *ohne weitem Schnökel* ような人間労働と見なされるが、これに反して、裁断労働は、いっそう高度に発達した労働力の支出と見なされる。だから、農僕の労働日はたとえば  $1/2 \times W$  という価値表現で表わされるが、裁断師の労働日は  $W$  という価値表現で表わされているのである。とはいえ、この差異は量的であるにすぎない *nur quantitativ*、上着が裁断師の一労働日の生産物であれば、それは、農僕の二労働日の生産物と同じ価値をもっている。このように、裁断労働はつねに、何倍かされた農民労働としてのみ計算されている *zählen* のである。(さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は……)

(1) 「たとえば農僕の労働力は……」の削除、(2) 元来二要因論として説かれた「確かに、単純な

平均労働そのものは、……」の二重性論への移動、初版と第二版の以上二点の差異は、本パラグラフの論理を把握する上に示唆するところ大である。

さて本パラグラフをは三部に分かれよう。ギリシア文字を付した(α)(β)(γ)がそれぞれあるが、それぞれは『大論理学』[I 反省の一般的性格]の三つのパラグラフに対応する。

(α)では「形態 Form」とその「変換 [交替] Wechsel」がキーワードである。まず「量的な区別……はさしあたりまだわれわれの問題ではない」。それは十二パラグラフで採り上げられるだろう。では問題は質であるのか。実際マルクスは裁縫労働と織布労働が「質的に異なる労働」であると言う。ただしそこで確認されるように——「価値としては、上着とリンネルとは同じ実体をもつ物であり、同種の労働の客観的表現である」——、労働が「純粋な否定態 (本質)」(前パラグラフ)として把握された今、質したがって有は有論的・直接的に把握されるのではなく、本質論的に捉え返されねばならない。すなわち「同じ個人の労働」が「異なる労働様式」で行なわれ、また資本主義社会において「一定部分の人間の労働」が「労働需要の方向が変化するにつれて」形態を変えて供給されるように、質的に異なる労働が「形態変換 Formwechsel」するものとして把握される。だが Form そして Wechsel とは何であるか。

「仮象は空なもの(無であるという性格をもったもの)、または本質をもたないものである」(p. 19)が、——超新星爆発の輝きがそうであるように——「空なもの、または本質をもたないものは、それがその中で映現する [仮象する] ところの或る他者の中に、その有 [存在] をもつのではない」(p. 19)。それは——仮象とは仮-象すなわち仮-象であるように——むしろ無であることそのことがその存在 (有) であるから、その有は「それ自身の [その固有の] 自己同等性 [自己との相等性] seine eigene Gleichheit mit sich」(同) である——無と同等であることがその有である。換言すれば「空なものは空なものである」——。否定的なもの(空なもの・本質をもたないもの)はこの [それが仮象して自己へと帰る] 自己自身との交替 (否定的なもの→否定的なもの) であるが、この交替が「本質の絶対的反省 absolute Reflexion としての規定である」(同)。

裁縫労働と織布労働とはともに有用的労働として仮象であったから(七パラグラフ)、その有は「それ自身の自己同等性」であるが、両者が「質的に異なる労働」であるのはそれぞれの「形態」によるのだから、この形態こそはそれらの有・固有の自己同等性である——自己同等性が即自有 [本来的な存在] であったことを想起されたい(六パラグラフ)——。そしてこの形態において有用的労働は否定的なものであり、それゆえ形態変換して(自己自身と交替して)「あるときは裁縫労働の形態で、あるときは織布労働の形態で、かわるがわる供給されている」。有用的労働はこのように「否定的なもの(自己自身との交替)であり、この交替が「本質(労働)の絶対的反省としての規定である」である。

(β)のキーワードは「単純な労働」である。ここに第一節類似の叙述が見られることはす

で指摘した。すなわち「(第一節では諸商品の交換に基いて、また本節では有用の労働の形態変換を経て) 労働の有用性格を度外視すれば、労働に残るのは、それが人間的労働力の支出である」こと、そして「商品の価値は、人間的労働自体を、人間的労働一般の支出を、表わしている」こと、これである。つまり(β)の前半は第一節の叙述内容の再認である。ただし両節は論拠の異なりと共に後の展開も隔たっている。第一節では、商品価値は「商品の交換関係または交換価値のうちみずからを表わしている共通物」(十二パラグラフ)、実体として把握されたのに対し、本節では「人間的労働一般の支出」から「単純な労働」が導かれ、課題は依然労働(反省運動)の解明に置かれる。つまり価値は実体よりはむしろ本質として、その追求は反省(関係の第一次性)の中でのことである——それゆえ、第二版で削除された農僕の労働力云々の叙述は、將軍や銀行家の労働が「さらに一段と渦巻き模様で飾り立てられ」たものであることを明示して、「単純な労働」対「複雑な労働」という(β)の主題を理解し易くする。この削除にかぎっては改訂は成功していないと思われる——。

さて(α)で明らかになったごとく、有用の労働の「交替」は「本質の絶対的反省としての規定」であるが、第一節の再認を経て当の本質は「商品の価値」である。そして絶対的反省において「自己に関係する(自己と同等である)ところの否定態(空なもの)は自己自身の否定である」(p.19)から——空なものが「関係させられるところのもの」(III p.27 註釈)はその自己同等性・即自有であるから、空なものは即自有ではないものとして「自己自身の否定」である——、この否定態は「否定態であると共に、また止揚された(自己に還帰している)否定態でもある」(P.19)、すなわち「(否定的なものが否定的なものなのであるから)単純な[単一な]einfach自己同等性——それは否定的なものそれとしての肯定である——または直接態である」(同)。そして「否定態の本性」(同)とは、この「否定態が否定態そのものであって、また否定態そのものではないということ」(同)、換言すれば「二つのことが一つの統一の中にあるということ」(同)である。つまり有用の労働はその交替において「本質の絶対的反省」であり、その「本性」は単一人間的労働(単一な直接態)すなわち平均的な「単純な労働」である。だから裁縫労働・職布労働(空なもの)はこの「(単一な)人間的労働力を支出する二つの異なった形態にすぎない」のであった。

(γ)ここでの最初の検討課題は、上述のように、初版における二要因論の叙述がほぼそのまま転用されていることである。反省が「まず差し当っては、無から無への運動であり、したがって自己自身と合致する[合体する]mit sich selbst zusammengehenところの否定である」(p.19)——(α)で説かれた——ように、「単純な平均労働そのものは、国を異にし文化史上の時代を異にすれば、その性格を変える[交替する]」——同じく(α)で説かれた——。そして反省の自己との合致が「一般に単純な自己同等性であり、すなわち直接態である」(同)——(β)で説かれた——ように、単純な平均労働は「現に存在する一つの社会では、(直接態として)与えられている」——同じく(β)で説かれた——。これに対して複雑な労働は「単純労働の何乗かされたもの、ま

たはむしろ何倍かされたものとしてのみ通用する」。なぜか。このように単純労働と複雑労働との連関が(γ)の主題であり、そうであれば、初版で二要因論に属した叙述はこの場にこそふさわしい。労働の二重性論に置かれることで、論理の進行により即したものになるからである。

先に触れた反省の自己との合致は「否定が自己の他在 Anderssein としての自己同等性の中へ移行すること [移行する運動] übergehen ではない」(p. 19)。それはむしろ「移行の止揚としての移行 [移行する運動を止揚する運動としての移行する運動]」(p. 20) である。なぜなら反省とは「否定的なものの自己自身との直接的な合致 [合一] unmittelbares Zusammenfallen des Negativen mit sich selbst」(同) だからである — 悟性的な移行と弁証法的な自己還帰 Rückkehr in sich については有論の第二章定有「C無限性」を参照 — 。かくして反省は、第一に「自己との同等性であり、直接態である」(同) — 反省の直接的存在の面 — 。けれども第二に、「この直接態は否定的なものの自己との同等性であり、したがって自己自身を否定する — 否定的なものがその関係させられるところのものに還帰する — ところの同等性である」(同) — 反省の自己内反省の面 — 。すなわち反省は「それ自身 [本来的に] an sich 否定的なものであるところの直接態」(同)、それゆえ「直接態ではないところの直接態」(同) である。そこで単純労働は「自己との同等性であり、直接態」であったから、それは「否定的なものの自己との同等性」であり、「国を異にし文化史上の時代を異にすれば、その性格を変える (つまり否定的なものである) が、現に存在する一つの社会では、(そこに還帰するものとして) 与えられている」。換言すれば即目的に [本来的に] 否定的であるから、自己内反省されてそれは複雑労働すなわち「直接態ではないところの直接態」である。逆に、複雑労働は「単純労働ではないところの単純労働」ゆえに度量単位たる単純労働に「還元される」が、その還元の「さまざまな比率」は複雑労働が「直接態ではない」ゆえに労働する「生産者たちの背後で……確定され」て、還元された複雑労働は (直接態ではないところの) 直接態である。

(11) p. 76 ⇔ III 「C反省」の「1 措定的反省」の [II 直接性の二面] p. 20~22

したがって、価値である上着およびリンネルにおいては、それらの使用価値の区別が捨象されている abstrahiert ように、これらの価値に表わされている労働においては、裁縫労働および織布労働というそれらの有形的形態の区別が捨象されている。使用価値である上着およびリンネルが目的を規定された zuweckbestimmt 生産的活動と布および糸との結合したものの Verbindungen であり、これにたいして価値である上着およびリンネルは単なる同種の労働凝固体 gleichartige Arbeitsgallerten であるように、これらの価値に含まれている労働は、布および糸にたいするその生産的なふるまい produktives Verhalten によってではなく、ただ [単に] nur 人間の労働力の支出としてのみ通用する gelten。裁縫労働と織布労働とが使用価値である上着およびリンネルの形成要素であるのは、まさにこれらの労働の異なる質によって

である。裁縫労働と織布労働とが上着価値およびリンネル価値の実体であるのは、ただ、これらの労働の特殊な *besonder* 質が捨象され *abstrahieren*、両方の労働が等しい質、人間的労働という質をもっているかぎりでのことである。

本パラグラフでも叙述は『大論理学』に倣って三段階で進行する。

(α)「したがって、価値である上着およびリンネルにおいては、それらの使用価値の区別が捨象されているように、これらの価値に表わされている労働においては、裁縫労働および織布労働というそれらの有形的形態の区別が捨象されている」。⇔『大論理学』の〔Ⅱ直接性の二面〕の〔1.被測定有〕

構文的には「ように *wie*」が二つの句を接続する。前句は前節説かれた内容の再認であり — 「諸商品の交換関係そのものにおいては、それらの物の交換価値は、それらの物の諸使用価値とはまったくかわりのないものとして、われわれの前に現われた。そこで、労働諸生産物の使用価値を現実には捨象すれば、いままさに規定されたとおりのそれらの価値が得られる」(第一節十二パラグラフ) — 、また後句の内容もすでに前節で押さえられていた — 「もしもわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば……(労働生産物は)もはや、指物労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他の一定の生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有形的性格とともに……これらの労働のさまざまな具体的形態も消えうせ、これらの労働は、もはや、互に区別がなくなり云々」(第一節十パラグラフ) — 。しかも労働の「有形的形態の区別の捨象」については前パラグラフでも有形的労働の「形態変換」において確認され、だからこそ労働は「単一な労働」として把握されたのであった。そこでかかる繰り返しの意味が問われねばなるまいが、まず留目すべきは、前句が「価値である上着およびリンネル」についての叙述、後句が「価値に表わされている労働」についての叙述だという点である。つまり一文の中に、対象的な物とその物に向き合う主体の活動とが取り上げられるのだが、これは労働(反省)が対象的な人間活動であり、その考察が対象との連関においてはじめて可能である(反省とは、差し当たっては、何物かについての反省である)ことを反映している。

さて、ここで上着は「価値である上着」であるから、「上着は価値である」の反省が得られる。一般に「SはPである」において、主語Sは直接態(直接に与えられたもの)と見られるが、それは実は「Pである」と述語されて[規定されて]はじめてそれ自身(本来のS)である — このことをヘーゲルは「反省がその規定の作用を進める場合に目標となる普遍……は(反省の)出発点となるところの直接的存在の本質と見られ、したがってこの直接的存在は空なものとなり、そのためにこの直接的存在からの還帰、すなわち反省の規定作用がはじめて、その真実の有 *wahrhaftes Sein* の面での直接的存在の測定となる」(Ⅲp. 26 註釈)と説明している。ここでは直接的存在が(1)反省の出発点・空なもの、(2)測定されたもの、の両面で把握されていることに留意する。反省論はこの二面の直接的存在をさまざまに捉え返して進行する — 。つまりSすなわち空なものである直接的存在



は「Pである(S)」ことで真に措定され、それゆえ「否定的なもの(空なもの)の(本来の)自己自身への関係 Beziehung は、その自己への還帰 Rückkehr in sich である」(p.20)。かくして否定的なものはこの関係(自己還帰)において止揚されており(S→「PであるS」)、その直接態も、実は最初の空なものとしてのそれではなく、「全くただこのような関係として、または或る否定的存在からの還帰としてはじめて直接態」(同)なのである——直接的存在(1)が自己還帰して(2)である——。直接態はかく把握されて「被措定有[定立された存在] Gesetztsein」であるが、それは「全く規定態という意味でのみ、或いは自己を反省するものという意味でのみ直接態」(同)である——「被措定有」は、一方「……有-sein」ということで直接態であることを指し、他方「被措定 Gesetzt-」ということで措定する運動(作用)によって媒介されていることを意味する。それは直接態(有)ではあるが、媒介されてすでに有の領域にはないところの有であるから、全くの所与ではなく反省運動で措定されてはじめて直接態なのである。換言すれば、Sは「SはPである」において「PであるS」としてSである、それ以外ではないのだから、被措定有「PであるS」と反省「SはPである」は別のことでなく、差異を言うならば、それは前者がより(媒介された)直接態の側面を表わすのに対し、後者はより媒介する(運動の)側面を表わすという点にのみ求められる(後述)——。つまり「上着は価値である」とき上着は被措定有であり、リンネルも同様であるが、両者は今「価値である」という規定においてのみ把握されており、換言すればその直接態は「自己自身(空なものとしての使用価値)を止揚」しており(直接的存在(2))、それゆえ「それらの使用価値の区別は捨象されている」。以上は対象物(有)の面に関する考察であり、確認される内容は前節と同様であつてもその論理は別であり、ここでは有論的な交換関係(商品の他の商品との関係)に基かずに反省論的に把握されている。

かくして(価値である)上着やリンネルは被措定有すなわち「否定的なものの自己への還帰としてのみ存在するところの直接態」(同)であるが、それは「仮象の規定態(裁縫労働および職布労働という有用的形態)」を形成していたところの直接態」(同)であり、「前には反省的運動の出発点と見られたところの直接態」(同)である——「一定部分の人間の労働が、あるときは裁縫労働の形態で、あるときは職布労働の形態で、かわるがわる供給されている」(十パラグラフのα)。すなわち「裁縫労働は人間の労働である」の反省である——。したがって、その直接態が実は出発点でなく「還帰または反省そのものとして、はじめてあり得る」(同)以上、反省(労働)は「還帰であることによってはじめて始まるもの、または還帰するものであるような運動」(同)である。つまり「価値に表わされている労働において」——「裁縫労働は価値に表わされている労働である」等——、その出発点とされた「裁縫労働および職布労働という有用的形態」は「還帰そのものとしてはじめてあり得る(その直接態が止揚されている)」のだから、そこ(価値に表わされている労働)ではその「有用的形態の区別は捨象されている」。

(β)「使用価値である上着およびリンネルが目的を規定された生産的活動と布および糸との結合したものであり、これにたいして価値である上着およびリンネルは単なる同種の労働凝固体であるように、これらの価値に含まれている労働は、布および糸にたいするその生産的なふ

るまいによってではなく、ただ人間的労働力の支出としてのみ通用する」。(なお構文は wie die Gebrauchswerte …… bloße gleichartige Arbeitsgallerten, so …… である) ⇔ 同 [2. 措定の面]

構文的には (α) と同じである。すなわち wie を挟んで両句とも既述の再認である — 前句、「目的を規定された生産的活動」と素材との「結合」については本節八パラグラフ、価値としての商品が「単なる同種の労働凝固体である」ことは第一節十一パラグラフ。後句の単なる「人間的労働力の支出」は前節十一パラグラフおよび本節前パラグラフ —。また前句の主題が対象物であり、後者のそれが主体の活動であることも (α) に変わらない。なお邦訳書で二つのパラグラフに別れる『大論理学』の叙述は、原書ではまとめて一つのパラグラフである。

「反省が還帰する運動としてはじめて直接態であるかぎり、反省は措定する運動 das Setzen である」(p. 20) — 上掲註釈 (p. 26) を参照 — から、そこには反省がそこから還帰したそこへ還帰するような「或る他者は存在しない [現存しない] nicht ein Anderes vorhanden」(p. 20)。つまり反省は単に還帰として、「自己自身の否定者として」(同) のみ存在する — 還帰とは還帰するものご自己への還帰であるから、還帰するものは「自己自身の否定者」である —。そこで商品 (被措定有) と労働 (措定する運動) との連関がさらに考察される。労働が「措定する運動」である以上、そこには「或る他者は存在しない」。つまり使用価値の素材たる「布および糸」は「使用価値 (である上着およびリンネル) の他者ではない」。前者は反省運動すなわち「目的を規定された生産的活動」が「自己自身の否定者として」存在するとき、その否定されるころの「自己自身」だからである。「結合」は (八パラグラフ同様、ここでも反省論的に) かく解されるであろう。

けれども「この (反省が還帰する運動としてはじめてそれであるところの) 直接態 (すなわち被措定有) は止揚された否定 (否定する働きを失った否定) であり、止揚された自己還帰 (自己還帰という性格を失った自己還帰) である」(p. 21) — 被措定有としての直接態は、反省する運動なしには存在しないが、しかしまた、反省する運動そのものではない。つまり被措定有としての直接態は動的性格を失っており、これに対して反省そのものはあくまでも運動である (以文社版 p. 292 訳者注)。先に触れた被措定有と反省との差異である —。つまり反省は、否定的なもの (反省の動的性格が失われている) の止揚として、自己 (反省そのもの) の他者の止揚、すなわち (反省は媒介であるからその他者たる) 直接態の止揚である。それゆえ反省は、一方自己還帰として・否定的なものが自己自身と合致する [合体する] 運動 Zusammengehen mit sich として直接態でありながら、他方「(その自己自身と合致したところの) 否定的なものとしての否定的なもの (すなわち直接態) の否定でもある」(p. 21)。これを労働に即して言えば、直接態たる「価値である上着」は「止揚された自己還帰 (有目的労働) である」から、つまりここでは「(上着生産という) 生産的活動の規定された目的」は止揚され、それゆえ「価値である上着」は「価値であるリンネル」と同じく「(有目的形態の区別が捨象された) 単なる同種の (動的性格を失った) 労働凝固体である」。前節 (十一パラグラフ) で交換関係から導出されたところの「単なる労働凝固体」が、ここでは商品 (被措定有) を止揚

された労働（反省運動）と把握することで導かれた。

しかし、直接態を否定するには否定される直接態が前提されるから、この意味で反省は「前提する〔予め措定する〕運動 *das Voraussetzen > voraus-setzen*」である——「PであるS」→S——。この前提する運動において、反省は自己還帰（S→「PであるS」）を反省自身の否定として、すなわち反省の止揚が本質であるような存在として規定する。それで前提する運動は自己自身への関係〔ふるまい〕*Verhalten zu sich selbst* であるが、しかし「自己の否定者としての自己自身への関係」（同）である——「PであるS」→Sであるのは、Sが「（Pである）S」（自己自身）であるからだが、しかしSは「P（であるS）」だから「自己の否定者」である——。つまり前提する運動は「自己の中にとどまる *insichbleibend* ところの、自己関係的な否定態 *sich auch sich beziehende Negativität* である」（同）。そして素材たる「布および糸にたいする生産的なふるまい」がこの「前提する運動」すなわち「自己関係的な否定態」であることは上述した——或いは八パラグラフに説かれる如く、有用的労働は「素材の形態を変えることができるだけである」から、つまりは「自己の否定者（形態を変えるもの）としての自己自身（布や糸）へのふるまい」に他ならない——。これに対して「価値に含まれている労働」はそうしたふるまいではあり得ない——「生産的なふるまいによつてではなく」——。そのことが次に説かれる。

（前提する運動の）直接態（S）は還帰（「自己関係的な否定態」すなわちS→「PであるS」）としてのみ現われ、そして「始元の仮象 *Schein des Anfangs*」（同）であるところの否定的なものである（前提（始元）が還帰としてのみ現われるのだからそれは仮象であり、前提として否定的なものである）。かくして（仮象は本質の否定的なものであり、それが還帰して現われるのだから、その）本質の還帰は「本質の自己自身からの反撥〔自己自身をつきはなす運動〕*Sich-Abstoßen*」である——本質の自己反撥については一パラグラフで触れられたところである。すなわち本質はそれが即自的に含むところの各規定を区別する自己反撥として、自己に対する否定的関係であるとされた——。換言すれば、「自己内反省は本質的には、反省がそれからの還帰（S→「PであるS」）である当体を前提する運動である *Die Reflexion-in-sich ist wesentlich das Voraussetzen dessen, aus dem sie die Rückkehr ist*」（同）——反省運動「SはPである」の前提Sは、<われわれにとって先なるもの>としては直接的なもの（有）であり、それは自己還帰「PであるS」における反省の止揚である（生産的なふるまい）。また<事柄にとって先なるもの>としては自己内反省（本質）であり、自己反撥「PであるS」において存立する（価値に含まれている労働）——。使用価値に表わされる有用的労働（自己関係的な否定態）は「始元の仮象」として「否定的なもの」であり、それゆえこの仮象を否定する本質は「価値に含まれている労働」である。つまり労働は「自己自身からの反撥」として、「価値に含まれている労働」からの有用的労働の反撥である。換言すれば、労働は「本質的には、有用的労働が「それからの還帰である当体を前提する運動」として、「価値に含まれている労働」である。それはこのように本質的な運動であるゆえに、「布および糸にたいするその生産的なふるまいによつてではなく、ただ人間的労働力の支出としてのみ通用する」。

(γ) 裁縫労働と織布労働とが使用価値である上着およびリンネルの形成要素であるのは、まさにこれらの労働の異なる質によってである。裁縫労働と織布労働とが上着価値およびリンネル価値の実体であるのは、ただ、これらの労働の特殊な質が捨象され、両方の労働が等しい質、人間的労働という質をもっているかぎりでのことである。⇔ 同 [3. 前提の分析]

本質が（自己自身をつきはなす）自己同等性であるのは、その自己同等性を止揚する運動においてはじめて *erst* そうなのである — 「SはPである」において、前提Sは自己自身たる「(Pである) S」したがって「P (であるS)」をつきはなすが、それは「PであるS」(止揚されたS) としてはじめてそれである — 。つまり本質は自己自身（自己同等性・即自有）を前提するが、また「この前提を止揚する運動が本質そのものである」(p. 21)。逆には「この前提を止揚する運動 (S→「PであるS」) がすなわち（自己還帰して）前提そのもの（「PであるS」→S）である」(同)。だから反省は、それが超出し *hinausgehen*、またそれから還帰するところの直接的存在 (S) を直接に [眼前に] 見出す *vorfinden* (同)。けれどもこの還帰する運動がそこに見出される直接者 *das Vorgefundene* を前提するのであるから、この「見出される (前提される) 直接者は、それが捨てられる *verlassen* (止揚される) ことによって、はじめて現成する *werden*」(p. 22)。すなわち「その直接態は止揚された直接態」(同) である。反対に、「止揚された直接態 (すなわち媒介されたもの) は自己への還帰であり、本質が自己の許に到達する運動 *das Ankommen bei sich* であり、単純な [単一な] *einfach* 自己同等的な有 (即自有) である — 「単純な自己同等的な有」については六パラグラフをも参照 — 。それとともに (本質は即且向自有であるのにその到達が即自有であるから) この自己の許への到達は本質の止揚であって、自己自身を反撥するところの前提的反省 *voraussetzende Reflexion* である。したがって、この反省の自己反撥が自己自身への到達なのである」(同)。

労働は今「本質的に」把握されている (上述)。そこでまず有用的労働が本質的に捉え返される。有用的労働が有用的労働であるのは、それが有用的形態をもって「裁縫労働である有用的労働」「織布労働である有用的労働」としてである (止揚された有用的労働)。つまり有用的労働は自己自身を前提するが、また前提たる自身を止揚する。逆には有用的労働の止揚が有用的労働そのものである。だから有用的労働は直接的存在として「それが止揚されることによって、はじめて (例えば裁縫労働として、織布労働として) 現成する」。つまり裁縫労働等は直接態ではあるがこの意味で「止揚された直接態」(裁縫労働である有用的労働) である — 「裁縫労働である有用的労働」は「裁縫労働である」と規定されて規定態 (質) である。それゆえ「裁縫労働である有用的労働」と「織布労働である有用的労働」とは「異なる質」である — 。反対にこの「止揚された直接態 (異なる質) は自己への還帰」すなわち (本質としての) 有用的労働が「(規定されて) 自己の許に到達する運動であり」、このことで例えば裁縫労働は「単一な自己同等的な有 (裁縫労働の即自有) である」。それとともにこの自己の許への到達は本質 (有用的労働) の止揚であって、「自己自身を反撥するところの前提的反省である。こ

の反省の自己反撥が自己自身への到達」すなわち有用的労働の「生産的なふるまい」として使用価値を形成することは上述した。

さて、反省運動は「自己自身の中における絶対的衝突 *absoluter Gegenstoß*」(p. 22) であって、ここでは自己還帰の前提は還帰そのものの中のみある。すなわち「反省の出発点となるところの直接的存在の超越 *das Hinausgehen über das Unmittelbare* は、むしろこの超越の過程 [運動] によって、はじめてある *anfangen*」(同)。つまり直接的存在の超越がすなわち直接的存在への到達であって、こうして「運動は進展しながら、そのまま自己自身において転回する *sich wenden als Fortgehen unmittelbar in ihr selbst*」(同) ところの自己運動 (自己の中から行われる運動) である。というのは、「措定的反省は前提的反省であるが、しかしまたそれは前提的反省として、そのまま措定的反省であるからである *die setzende Reflexion voraussetzende, aber als voraussetzende Reflexion schlechthin setzende ist*」(同)。この意味で「反省は反省そのものであると共に、その非有である」(同)。したがってまた「反省は自己の否定者であるがゆえにのみ自己自身である。なぜなら、ただこの意味でのみ、否定的なものの止揚が同時に自己との合致としてあるのだからである」(同)。

反省運動としての労働において「反省の出発点となるところの直接的存在」は有用的労働であるから、それは「そのまま自己自身において転回」し、すなわちその「労働の特殊な質が捨象され (有用的労働の非有)、両方 (裁縫労働と織布労働) の労働が等しい質、人間的労働という質をもっている」。つまり「反省 (労働) は自己の否定者 (有用的労働) であるがゆえにのみ自己自身 (人間的労働) なのである」から、「裁縫労働と織布労働とは (否定的なものとしてその「止揚が同時に自己との合致としてあり」、すなわち) 上着価値およびリンネル価値の実体 (たる人間的労働) である」。

(12) p. 77 ⇔ III 「C反省」の「1 措定的反省」の [III 移行] p. 22~23

だが、上着もリンネルも単に価値一般ではなく、一定の [規定された] 大きさ *bestimmte Größe* をもつ価値であり、われわれの想定では、一着の上着は一〇エレのリンネルの二倍の価値がある。これらの価値の大きさのこの相違 *Verschiedenheit* はどこから生じるのか？ それは、リンネルが上着の半分の労働しか含んでおらず、したがって、上着を生産するにはリンネルを生産する時間の二倍にわたって労働力が支出されなければならない、ということから生じる。

労働が人間的労働として把握されたことを承けて、先に (+パラグラフ) 保留されていた量の面の考察が行なわれる。有論においては量は止揚された質として質から移行したが (I p. 220 第三章 向自「C反撥と牽引」、ここでは移行は「移行の止揚としての移行」(前々パラグラフ) であるから、量もまた反省論的に規定される。

止揚する運動としての反省が自己に対して前提するところの直接態は、そのままただ被指定有・即自的に止揚されたものにすぎず——Sはそのまま「PであるS」——、そしてこの被指定有は「自己への還帰（S→「PであるS」）と異なるものではない nicht verschieden」（p. 22）。しかし被指定有は、同時に「（自己還帰するところの）否定的なものとして規定され、すなわち直ちに unmittelbar 或る（一つの）被指定有（或る否定的なもの、すなわち自己の否定者）に対立するものとして、したがって或る他者（他の被指定有、自己とは別の否定的なもの）に対立するものとして規定される」（p. 23）——被指定有「PであるS」は「Pである」と規定（否定）された「否定的なもの」であり、そして「規定された有」は定有であるから（I p. 117 第二章定有）、それは「直ちに或る有」（有の否定者、自己の非有）に対立し、したがって「或る他者」（自己の非有たる有すなわち他の有が規定されたところの定有）に対立する。これを図式化すれば、「SはPである」→「Sは『PであるS』ではない」→「SはPでない」となり、ここに「（Pであると規定された）S」と「P（でない）と規定されたS）」の互に他者として対立する二つの被指定有が得られる——。かくして——被指定有が規定されているからには、これを指定する——反省も「規定的となる」（同）が、「反省がこのような〔自己の〕規定態に基づいて nach 或る前提をもち、自己の他者〔反省の他者〕としての直接的な存在から出発する anfangen とき、反省は外的反省である」（同）。

労働が自己に対して前提する直接態すなわち有用的労働はそのまま被指定有であり、つまり「自己への還帰」によって「等しい質の労働」である（前パラグラフ）。しかし同時に有用的労働は「否定的なものとして規定され」、すなわち質の否定であるから「規定された大きさ（例えば一着の上着の価値は2W）」であって、それは「或る他者（例えば一〇エレのリンネルの価値W）に対立するものとして規定される」。では「これらの価値の大きさのこの相違はどこから生じるのか？」それは被指定有が規定的であることで、労働（反省）もまた「規定的となる（特殊化される）」からである。すなわち労働は「或る前提をもち、自己の他者としての直接的な存在から出発する」が、「商品の含む労働の分量したがって労働時間」がその出発点をなす。前節で商品（の比率的定量）と関係する直接的定量であった労働時間は（前稿 p. 26）、本節では「或る前提（反省の他者）」として（外的）反省の一項として把握された。

(13) p. 77 ↔ III 「C反省」の「2外的反省」 p. 23～25

したがって、商品に含まれている労働は die in der Ware enthaltene Arbeit、使用価値との関連 Bezug ではただ質的にのみ意義をもつ gelten とすれば、価値の大きさとの関連では、それがもはやそれ以上の〔それ以外の〕質をもたない ohne weitere Qualität 人間的労働に還元されているので、ただ量的にのみ意義をもつ。まえの場合には、労働のどのようにしてと、なにをするか Wie und Was が問題となり handeln、あとの場合には、労働のどれだけ多く Wieviel が、すなわちその継続時間 Zeitdauer が問題となる。一商品の価値の大きさ Wertgröße は、その商

品に含まれている労働の分量 [定量] Quantum だけを表わすから、諸商品は、一定の比率においては in gewisser Proportion、つねに等しい大きさの価値でなければならない。

本パラグラフをなす三つの文は、『大論理学』「2 外的反省」の一パラグラフ、二・三パラグラフ、四パラグラフにそれぞれの対応関係をもつ。

外的反省または実在的反省 reale Reflexion とは通常「反省」と呼ばれる運動であり、ヘーゲルはまず絶対的反省の外的反省への移行を説く。絶対的反省としての反省が「自己自身の中で映現する本質であって、(或る他者でなく)単に(自己還帰するところの)仮象、被措定有を自己の前提とするにすぎ」(p. 23) ず — 先に述べたく事柄にとって先なるもの>としての前提 —、前提的反省として直ちに措定的反省であるのに対し、外的反省は「自己を止揚された反省として、すなわち自己の否定的なもの(反省の否定的なものである直接的存在)として前提する」(同) — 「止揚された反省」とは本来の反省ではない反省であり、すなわち外的反省が絶対的反省の統一的性格(「前提的反省として直ちに措定的反省である」)を失っていることを言う(以文社版 p. 295 訳者注)。つまりくわれわれにとって先なるもの>としての前提 —。それゆえ外的反省は「二つに分かれ[二重化され・二面に分裂し] verdoppelt」(同)、一方では「(前提する運動 Voraussetzen における)前提されたもの das Vorausgesetzte として、或いは直接的存在であるところの自己内反省として」(同) ある — 「自己内反省は本質的には、反省がそれからの還帰である当体を前提する運動である」(十一パラグラフ) から、「前提されたもの」は自己内反省された直接的存在であり、すなわち「直接的存在であるところの自己内反省」である —。外的反省を「AはBである」(A・Bは互に他者である)とすれば、Aの面である。Aがなければ反省もないからそれは反省において「前提されたもの」である。外的反省は他方では、「否定的なものとして自己に関係する反省 sich auf sich beziehende Reflexion」(同)、すなわち「反省の非有(すなわちA。「前提されたもの」として「反省の非有」である)としての自己に関係する」(同) 反省である。Bの面であるが、BはAでないからAの「否定的なもの」であり、しかし「BであるA」としてAに関係する。それゆえ「否定的なものとして自己(A)に関係する反省」である。

そこで『資本論』であるが、「商品に含まれている労働」(反省)は、絶対的反省としては「自己自身の中で映現する本質(労働)であって、単に仮象、被措定有を自己の前提とするにすぎ」ず — 裁縫労働である有用的労働(前パラグラフ) —、それゆえ「使用価値との関連でただ質的にのみ意義をもつ」。これに対して外的反省としての労働は「自己を止揚された反省として、すなわち自己の否定者として前提する」から、それは「二重化される」。前パラグラフの例に戻れば、「一着の上着の価値」と「二〇エレのリンネルの価値」は共に規定された被措定有として互に他者である — 「A(一着の上着の価値)はB(二〇エレのリンネルの価値)である」という外的反省 —。前者は「前提されたもの、或いは直接的存在であるところの自己内反省」であるから、「価値である

価値」すなわち価値そのものであり、労働（反省）はこの面で「もはやそれ（人間的労働という質」（十一パラグラフ））以外の質をもたない人間的労働に還元されている」——ここで、有用的労働でなく、人間的労働が質的に把握されていることに注意——。他方後者は「否定的なものとして自己（前者）に関係する反省」であり、すなわち質の否定的なものであるから、労働はこの面で「ただ量的にのみ意義をもつ」。

このように外的反省は「或る有 ein Sein を前提する（或る有を前提にもつ）」(p. 23) —— 「前提されたもの」Aは「反省の非有」であるから「或る有」である——。これを承けて、以下では「第一に」外的反省の本性が、「第二に」外的反省の止揚が説かれる。

第一。外的反省が或る有を前提することは、しかし「この有の直接態が単に被措定有または契機である」(p. 23) という意味ではない。それは「むしろ自己への関係であって、この（自己へ関係する）規定態は単に契機としてあるにすぎない」(同) —— 前提Aは自己内反省「AはAである」であるから「自己への関係」である。そしてその規定態（「Aである」A）が「単に契機としてあるにすぎない」のだから、「xはAである」が或る有である。主語がそれ自体としては空なものであるこの関係においてのみ、Aは契機でありかつ自己関係（xは「Aであるx」ゆえにA、したがって「AはAである」）だからである。それが他ならぬ自己への関係であるゆえにこの直接態は自立的な存在であり、反省から独立した（それ自身反省であるところの）存在として前提されているが、この前提たる「或る有」は定有である。なぜなら、被措定有が媒介された直接態として反省の契機であるのに対し、ここでは自立的な直接態が契機なのであるからそれは或る有の契機であり、このとき或る有は定有だからである（以文社版 p. 295 訳者注）——。だから（Aが自己内反省であればそれは外的反省ではないから）、外的反省はその前提 Voraussetzung が反省の否定的なものであり、しかも「この否定的なものは否定的なものとして止揚されている」(同) という仕方で「前提に対して関係する beziehen」(同) —— 自己内反省が外的反省の一項なのだから、それは自己内反省としては「止揚されている」。そして「反省の否定的なものは直接的存在であり、それが「止揚されている」のだから媒介された直接的存在である。つまり自立的な前提Aが媒介されて「BであるA」すなわち「AはBである」。これが外的反省だということである——。ところで絶対的反省の立場からこの反省を捉え返せば、「反省は、その措定する運動の中で直ちにその措定を止揚」(同) し、こうして「反省は一つの直接的な前提をもっている」(同)。したがって反省は、「反省がそこから始まり、またそこから出てはじめて反省が自己還帰の運動であり、この反省の否定的なものの否定である von dem sie anfängt und von dem aus sie erst das Zurückgehen in sich, das Negieren dieses ihres Negativen ist」(p. 24) ようなものとして、措定する運動を直接的に〔眼前に〕見出す vorfinden —— 外的反省「AはBである」を絶対的反省の立場から捉え返せば、それは自立的な（自立的と見られた）前提を直接的な unmittelbar（外的反省によって媒介される mittelbar のではない）前提として、すなわち反省から独立しているのではない前提としてもっている。つまり前提（反省の否定的なものは「Bである」と措定（否定）されてはじめて前提なのであるからそれ自体としてはxであり、したがって反省「AはBである」は「xはBである」として「眼前に見出される」——。



しかし — 絶対的反省を離れて外的反省に戻れば — 「この前提されたもの (A) が否定されたもの、または措定されたもの ein Negatives oder Gesetztes である (「BであるA」) ということは、その前提されたものにとっては無関係 dasselbe nichts angehen」 (p. 23) である。「(前提されたものが措定されたものであるという規定はただ措定的反省に属すだけだから、外的反省の一面として措定的反省と切り離された) 前提する運動においては、被措定有は、ただ [単なる] nur 止揚された被措定有としてあるにすぎない」 (同)。このかぎり、外的反省が直接的存在 (前提A) のもとに an dem Unmittelbaren (「Bである」と) 規定し、措定する bestimmen und setzen ことは、この直接的存在にとっては外面的な規定である」 (同) — 外的反省においてAがBに否定されることは偶然 (Aにとって無関心) であり、無関係なAとBを関係付けるのは「われわれ」の主観である (III p. 25 註釈) というのが外的反省の立場である — 。

以上より、外的反省は、直接的存在反省 (「xはAである」) と自己内反省 (「xはBである」) とをその両項とするところの推論 Schluß である。そしてこの推論の中辞 [媒辞] Mitte は両項の関係 (「AはBである」)、すなわち規定された直接的存在 das bestimmte Unmittelbare (BであるA) である。それゆえに、この中辞の一面すなわち直接態は一方の項にのみ属し、他面すなわち規定態または否定 die Bestimmtheit oder Negation は、他の項にのみ属することになる — 先には外的反省の二面であったものが、推論の両項として捉え返されてその分裂が明確になった — 。

外的反省としての労働は推論であるから、「直接的存在と自己内反省とをその両項とする」。前者「xはAである」は定有 (規定された、質的な有) (I p. 126 第二章定有) すなわち商品の質としての使用価値) であるから、ここで述語されるのは「労働のどのようにしてと、なにをするか」である。後者「xはBである」は定有にとっての「外面的な規定」であり、そして「有に無関心となった規定態」 (II p. 1 第二篇大きさ (量)) は量であるから、ここで述語されるのは「労働のどれだけ多く、すなわちその継続時間」である。労働の二面、有用的労働と人間的労働が外的反省の相互外在的な二元として把握されたのである。

第二に、けれども二項的・二元的な外的反省を絶対的反省の立場から考察すれば、それは反省として「直接的存在を措定する運動であって、そのかぎりこの直接的存在は否定的なもの、または規定されたもの das Negative oder Bestimmte となる」 (p. 24) — 外的反省「AはBである」のAが「規定されたもの」であるから、「BであるA」すなわち「AはBである」なのである — 。

しかし外的反省は直接的存在を前提する (予めもつ) 運動であるから、それは直ちに「(直接的存在を措定するところの) 自己の措定する運動の止揚でもある」 (同)。すなわち外的反省は否定の中で「その否定 (措定する運動) の否定」 (同) であり、ここに措定された直接的存在が止揚される — 「AはBである」のB (措定する運動) が止揚されそこで「直接的存在Aが止揚される」から、Bが「AはBである」なのである — 。

けれども外的反省はそれとともに同じく措定する運動すなわち「自己に対して否定的な直接的存在 (前提) の止揚」 (同) でもあり、それゆえ外的反省においては「反省とは異なる他者 [反省にとって疎遠なも

の]として、反省がそこから出発するよう<sup>に</sup>見えたこの直接的存在(A)は、むしろこの反省の出発においてはじめて存在する dieses (Unmittelbaren), von dem sie (Reflexion) als von ein Fremden anzufangen schein, ist erst in diesem ihrem Anfangen] (同) — Aすなわち「AはBである」が、Bすなわち「AはBである」においてはじめて存在する —。かくして(前には反省の二項であった)直接的存在と反省そのもの was die Reflexion ist の同一のもの(「AはBである」)であることが、単に「われわれにとって für es」ないしは外的反省においてのことではなく、そのことがむしろ「測定されている」(p.25) — この自同的な反省を以下「RはRである」とする —。ここに直接的存在に対する反省の外面性が止揚される。反省の自己否定的な(自己を否定する働きをもつ)測定する運動は、反省が自己の否定者すなわち直接的存在と合致する運動 Zusammengehen であって、この合致が本質的な直接態そのものである。「それゆえに、外的反省は外的なものではなくて、同様にまた(本質的な)直接態そのものの内在的な反省 immanente Reflexion であること、換言すれば測定的反省によって存在するところのものは即且向自有的な本質であることが明らかになる Es ist vorhanden, daß das, was durch die setzende Reflexion ist, das an und für sich seiende Wesen ist。この意味で、反省は(それ自体で自立している an und für sich) 規定的反省である」(同)。

上述したところより反省(労働)は外的反省「AはBである」(「質は量である」すなわち止揚された質としての量)において人間的労働の「大きさ(量)」(II p.1 有論第二篇の標題)(価値の大きさ)を表わし、(Aを絶対的反省の立場から捉えればそれは「規定されたもの」であるから)この「大きさ(量)」の「規定されたもの」は「規定性を伴う量 Quantität mit einer Bestimmtheit」(I p.28 第二章定量)すなわち定量[分量]である。しかし直接的存在を前提する外的反省においてはBはAと「同一のもの」(すなわち「AはBである」)であるから、これも労働の定量[分量]である。かくして労働(「RはRである」)は定量と定量の関係 Verhältnis すなわち量的比例[量的関係] quantitatives Verhältnis、比率であり(前節五パラグラフ)、その比率が一定(定率)であるとき — 例えば「一着の上着は一〇エレのリンネルの二倍の価値がある」(前パラグラフ) —、諸商品(一着の上着と二〇エレのリンネル)は「つねに等しい大きさの価値でなければならない」。

(14) p.78 ⇔ III 「C反省」の「3 規定的反省」の [1. 規定的反省の本性] p.27~28

たとえば、一着の上着の生産に必要とされるすべての有用的労働の生産力が不変のままに unverändert とどまるならば、上着の価値の大きさは、上着自身の量が増えるにつれて増大する。一着の上着が  $x$  労働日を表わすなら、二着の上着は  $2x$  労働日を表わす、等々。しかし、一着の上着の生産に必要な労働が二倍に増加するか、あるいは半分減少するものと仮定しよう。まえの場合には、一着の上着は以前の二着と同じ価値をもち、あとの場合には、二着の上着が以前の一着と同じ価値しかもたない。もともと、どちらの場合でも、

一着の上着は相変わらず一着の上着として役立つ [同じ役割 (有用性) を果たし] ein Rock nach wie vor dieselben Dienste leistet、それに含まれている有用的労働も相変わらず同じ品質 Güteのものである。ただ [けれども] aber、その生産に支出された労働分量が変わったのである sich verändern。

反省の考察は一先ず規定的反省に到達した。それは「措定的反省と外的反省との統一である」(p. 27) が、このことを「もう少し詳しく考察しよう」(同) ——この「考察」の歩みを先取りして要約しておく。反省「AはBである」の外面性が止揚されて「RはRである」の自同的な反省であるが、しかしこれが単なる同語反復でないためには、Rが「Rかつ/または¬R」として把握され、つまり反省は「(R als ¬R) als (¬R als R)」の四肢構造でなければならない(その一般的な表現は反省「SはPである」の四肢構造「(S als P) als (P als S)」)。これが以下の課題である。『資本論』に即して換言すれば、前節で商品の四肢構造「(A als ¬A) als (¬A als A)」が「二つの定量の度量比例」(前稿 p. 30)であったと同じく、ここでも量的関係にある二つの定量はそれぞれが als 構造において把握されねばならない。ただしその把握は、前節のように有論的にでなく、あくまで反省論的になされるべきである。以上より、まず本パラグラフで¬Rの何であるかが考察される——。

規定的反省はまず「規定的 [反省] になるものとしての外的反省 die äußere Reflexion, die bestimmend wird」(同)、すなわちまだ完全には規定的反省になっていない反省である——この「完全には規定的反省になっていない反省」とは如何なる反省であるのか理解し難いと、以文社訳者は述べているが (p. 297 訳者注)、本稿は四肢構造がまだ措定されていないところの「RはRである」がそれであると考え。『資本論』におけるその具体例は、後述するように生産力が不変のままにとどまるところの労働である——。さて「外的反省は直接的な有 unmittelbares Sein から出発し、措定的反省は無 Nichts から始まる」(p. 27)。そして規定的になりつつある外的反省は「一つの (或る) 他者 ein Anderes を措定するが、(外的反省と違って) 止揚された有 (または定有 (四パラグラフ)) をではなく [の代りに] an die Stelle des aufgehobenen Seins、(「有でない」というかぎりで) 本質を (一つの他者として) 措定する」(同) ——この「本質」について以文社訳者注 (p. 297) は「被措定有」であるべきとする——。また「この措定は一つの他者の代りとして an die Stelle eines Anderen 自己の規定を措定するというのではない」(p. 27)。なぜなら、それは無から始まる措定的反省であるから、そもそも或る他者はなく、したがって何らの前提をももたないからである——外的反省で前提Aと規定態「BであるA」とは互に他であり、つまりA (他者) の代りとして「B (であるA)」が措定された。これに対して「規定的になりつつある外的反省」は「無から始まる」のだから、その措定は「一つの他者の代りとして」ではない。ではそこで措定される「自己の規定」とは何であるのか、以下この点が説かれる。反省「RはRである」が無から始まるのだから、それは「xはRである」と表わされ、これが「規定的になるものとしての外的反省」である——。けれども (前提をもたない反省だから) 「措定はまだ完全な、規定的な反省ではない」(同)。それが措定するところの(「Rであるx」という) 規定は単に一つの被措定者 ein Gesetztes にすぎず、それゆえ

「BであるA」がAの他者であるのと同じく、xの他者という性格をまだもっている。「この被措定者は直接的存在ではあるが、しかし自己自身と同等なもの *sich selbst gleich* としての直接的存在ではなくて、自己を否定するもの *sich negierend* としてのそれである」(同) —— 「AはBである」において直接的存在Aと「B(であるA)」とは共に有であるから「同等なもの」である。他方「xはRである」においては、そもそもxは無であるから、それと「R(であるx)」とを「同等のもの」とは言えない。しかし「Rであるx」は「Rである」という規定(否定)においてあるところのxであるから、「自己を否定するもの(自己の否定的なもの)」である。なお「Rであるx」は有ではないので被措定有でなく被措定者である——。被措定者であるから「それは自己への還帰[反省]と絶対的に関係している *es hat absolute Beziehung auf die Rückkehr in sich*」(同) ——  $x \rightarrow$  「Rであるx」——。「それは、ただ自己内反省の中のみあって、まだ反省そのもの(本質)ではない」(同) ——  $x \rightarrow$  「Rであるx」であるからxは前提であり、「Rであるx」は「(前提する運動たる)自己内反省の中にある」が、ただし前提が無なのであるから「まだ反省そのもの(完全な規定的反省)ではない」——。

本パラグラフで労働「xは労働分量である」(反省「xはRである」)は、完全な規定的反省でなく「規定的になるものとしての外的反省」であるから、それは無から始まって何らの前提をもたない。したがって「労働分量(であるx)」も「一つの他者の代りとして」措定されているのではなく、換言すれば労働生産力が(他の生産力に)交替[変動]することはなく、それは「不変のままにとどまる」。そして労働は「完全な、規定的な反省」ではないから「単に一つの被措定者」を、「しかし自己自身と同等なものとしての直接的存在ではなくて、自己を否定するものとして」措定するが、(生産力との連関で把握される)その被措定者「労働分量(であるx)」は有用的労働の分量であるから、それが否定するところの「自己」(x)は人間的労働である。そして「(有用的)労働分量であるx」において労働分量したがって「上着自身の量」が増えれば、「それにつれて」人間的労働の「大きさ(量)」(前パラグラフ)——分量(定量)でないことに注意——したがって「上着の価値の大きさ」も増大する(「一着の上着がx労働日を表わすなら、二着の上着は2x労働日を表わす、等々」)。ただし人間的労働(x)は無であるから、それは「ただ自己内反省の中のみあって、まだ反省(労働)そのものではない」。そこで次に人間的労働が定量と把握される。

反省そのものでない「被措定者は、それゆえ(反省の)一つの(或る)他者である」(p.27)が——反省「xはRである」そのものでない被措定者「Rであるx」は「xはRである」の他者(否定)であるから、それは「xはRでない」すなわち「xは-Rである」の反省である。そこで以下反省「xはRである」と「xは-Rである」の連関が説かれる——、けれども「反省の自己同等性 *die Gleichheit der Reflexion mit sich* (即自有)がそのまま[完全に] *schlechthin* 保持されている *erhalten* という意味での他者である。というのは、被措定者は単に止揚されたものとしてのみ、すなわち自己自身への還帰(反省)と関係するものとしてのみ *nur als Aufgehobenes, als Beziehung auf die Rückkehr in sich selbst* あるものだからである」(同) —— 外的反省「AはBである」において被措定有「BであるA」はAの他者であり、「反省の自己同等性は完全には保持されて

いない。これに対して、「 $x$ は $R$ である」には「反省の自己同等性がそのまま保持されている」。このことをヘーゲルは次のように説明する。「有の領域（外的反省「 $A$ は $B$ である」）では、定有は自己の中に否定をもつところの有であった。したがって……否定も、それ自身直接的な（有的な）否定であった（有的な他者）。（他方）本質の領域（反省「 $x$ は $R$ である」）でこの定有に対応するものは被措定有（「 $R$ である $x$ 」）である。被措定有もまた一つの定有であるが、しかし……純粹否定態（すなわち「自己以外に自分が否定する何ものをもちたず、ただ自己の否定的なものそのもの〔主語は述語されてはじめてそれ自身であるから、主語そのものとしては「自己の否定的なものそのもの」である〕を否定する運動」（III p. 18 C 反省））としての有である。（つまり）それは（他へ移行する）有的なものとしての規定態または否定なのではなくて、全く止揚されたものとしての規定態または否定である」（p. 28）。反省「 $x$ は $R$ である」すなわち $x \rightarrow$ 「 $R$ である $x$ 」において、「 $R$ （である $x$ ）」は「自己（反省）の否定的なものそのもの（ $x$ ）」の否定であり、しかしそれは自己還帰するものとして「（ $R$ である） $x$ 」つまり「全く止揚されたものとしての規定態または否定」である。このとき $x \rightarrow$ 「 $R$ である $x$ 」は $x \rightarrow x$ であるから、同様に $x \rightarrow$ 「 $\neg R$ である $x$ 」も $x \rightarrow x$ であって、今反省において $R$ と $\neg R$ との異なりは無記である。そこでヘーゲルは続ける、「定有は単に被措定有にすぎない、というのが定有に関する本質の命題である」（同）。以下 $R \cdot \neg R$ の差異に無関心なこの反省を「 $x$ は $R$ である」で表わそう（念のため一言するが、差異に無関心ということは $R$ が内に差異を含んで変化しつつ $R$ それ自身だということであり、不変であることを意味しない）。なお被措定有者が即自有を保持していることでそれは有であり、つまり被措定有である——。かくして被措定有は一面では定有に対立し、他面では本質に対立するが、それゆえ「（上述のごとく）規定は単に一つの被措定有にすぎないとと言われるとすれば、このことは二重の *doppelt* 意味」（同）をもつ。すなわち規定は定有と対立する被措定有であるか、本質と対立する被措定有であるか、である。前の意味においては、定有は被措定有より高次のものとみなされ、被措定有は外的反省すなわち主観的なものに帰せられるが——この面での反省は「 $x$ は $R$ （ $\neg R$ ）である」——、「けれども実際は *in der Tat aber*、被措定有の方が高次のものである。なぜかと言えば、定有は被措定有（「 $R$ である $x$ 」）となつてはじめて、定有そのもの〔本来的にある定有〕*Dasein als das, was es an sich ist* なのであり、すなわち否定的なもの（本質でないもの）、全く自己還帰（反省）に関係付けられているところのもの *ein schlechthin nur auf die Rückkehr in sich bezogenes* として存在するからである」（同）。そうであれば、「被措定有はただ *nur* 本質との関係においてのみ被措定有なのであり、換言すれば自分自身への還帰（本質）の否定として、はじめて被措定有なのである」（同）—— $x \rightarrow$ 「 $R$ である $x$ 」において、「 $R$ である $x$ 」は「自分自身への還帰（自己還帰する $x$ ）の否定」である——。

被措定有者「有用的労働の分量である $x$ 」は、反省そのものでないが「反省の自己同等性（即自有）がそのままに〔端的に〕*schlechthin* 保持されている」——「有用的労働の分量である $x$ 」が端的に $x$ なのであり、つまりは $x \rightarrow$ 「（有用的労働の分量である） $x$ 」——。だから（ $x \rightarrow$ 「 $R$ である $x$ 」 $\cdot$   $x \rightarrow$ 「 $\neg R$ である $x$ 」が共に $x \rightarrow x$ なのであるから） $R$ と $\neg R$ との異なりは無記であるが、このことは「二重の意味」をもつ。第一。反省「 $x$ は $R$ である」においては $R$ の $R$ （有用的労働の或る分量したがって或る生産力）であ

るか $-R$  (有用的労働の他の分量したがって他の生産力) であるかは問われないから—— $x \rightarrow$ 「有用的労働分量(1)である $x$ 」・ $x \rightarrow$ 「有用的労働分量(2)である $x$ 」が(1)(2)の異なりに無記なのであるから——、労働は今「 $x$ は有用的労働である」であり、その被指定有「有用的労働である $x$ 」は純粹否定態として「自己自身(有用的労働の自己自身 $x$ すなわち人間的労働)へ還帰する」ところの「止揚された規定態」である。そこで生産力が変動( $R$ と $-R$ の交替)して「一着の上着の生産に必要な労働が二倍に増加するものと仮定する」と、被指定有「有用的労働(である $x$ )」は止揚されて規定態「(有用的労働である) $x$ 」だから、「一着の上着は(止揚された使用価値すなわち価値として把握されて)以前の二着と同じ価値をもつ(ものとしてある)」。これは「有用的労働である $x$ 」の「定有と対立する」面である。(「 $x$ は労働分量である」の反省である)この面では被指定有は外的反省すなわち主観的とされて定有が高次のものとみなされるから、「一着の上着は相変わらず一着の上着として役立ち(同じ役割を果たすものとして定有し)、(高次の定有が同じであれば低次の被指定有も同じであるから)それに含まれている有用的労働も相変わらず同じ品質のもの(例えば「 $x$ は裁縫労働の分量である)」と把握される。第二。ただ[けれども] aber 実際は(労働が規定的になりつつある外的反省であるかぎり)「有用的労働である $x$ 」は「本質(人間的労働)との関係においてのみ被指定有」であるから、「( $R$ において $R$ が $-R$ になり、すなわち労働分量が変化して)一着の上着の生産に支出された労働分量が変わったのである」。

(15) p. 78  $\leftrightarrow$  III 「C反省」の「3規定的反省」の[2.規定的反省の分析] p. 28~30

より大きい分量の使用価値は、それ自体としては an und für sich、より大きい素材的富をなす[である] bilden。二着の上着は、一着の上着より大きい素材的富をなす。二着の上着があれば、二人に着せることができるが、一着の上着では一人にしか着せられない、等々。とはいえ、素材的富の量の増大に対応して entsprechen、同時にその価値の大きさが低下することもありうる。このような対立的運動 gegensätzliche Bewegung は、労働の二面的性格 zwieschlächtiger Charakter から生じる。生産力は、もちろんつねに、有用的具体的労働の生産力であり、実際、ただ、与えられた時間内における in gegebenem Zeitraum 合目的的生産的活動の作用度だけを規定する。だから、有用的労働は、その生産力の上昇または低下に正比例して im direkten Verhältnis、より豊かな生産物源泉 Produktenquelle ともなれば、より貧しい生産物源泉ともなる。これにたいして dagegen、生産力の変動[交替] ein Wechsel der Produktivkraft は、それ自体としては、価値に表わされる労働にはまったく影響しない gar nicht treffen。生産力は、労働の具体的有用的形態に属するから、労働の具体的有用的形態が捨象されるやいなや、生産力は、当然、もはや労働に影響を与えることができなくなる。だから、生産力がどんなに変動しても、同じ労働は同じ時間内には、つねに同じ価値の大きさを生み出す Dieselbe Arbeit ergibt daher in denselben Zeiträumen stets dieselbe Wertgröße, wie immer die

Produktivkraft wechsle。ところが aber、同じ労働は同じ時間内に、異なった分量の使用価値を — 生産力が上がれば、より大きい量を、生産力が下がれば、より小さい量を — 提供する。したがって、労働の多産性 Fruchtbarkeit der Arbeit を、それゆえ、労働によって提供される使用価値の総量を、増大させる生産力の変動は、もしもそれがこの使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮させるならば、この増大した使用価値総量の価値の大きさを減少させる。反対の場合には逆になる。

(上述のように、反省「 $x$ は $R$ である」においてその) 被指定有は本質の否定であるから「まだ反省規定 Reflexionsbestimmung (本質の規定・本質態) ではない」(p.28)。それは「否定性一般として単に規定態 nur Bestimmtheit als Negation überhaupt である」(同)。けれども「(被指定有を指定するこの) 指定 [指定する運動] は、(規定的反省になるものとして) いまや外的反省と統一している in Einheit。外的反省は、この統一の中では絶対的な前提する運動 absolutes Voraussetzen である」(同) — 反省「 $x$ は $R$ である」が外的でなく、また直接的でもない、絶対的な前提する運動である — 。すなわち「反省の自己反撥 [自己自身からつきはなす運動] das Abstoßen (>ab+stoßen) であり、或いは反省そのものとしての規定態の指定 Setzen der Bestimmtheit als ihrer selbst である」(同) — 「絶対的な前提」を $Q$ とすれば、「 $x$ は $R$ である」の前提が $Q$ であるから「 $Q$ は $R$ である」。しかし $Q$ は絶対的な前提であるから、 $R$ も $Q$ の「自己反撥」に他ならず、つまり $Q$ が自己自身をつきはなして規定態「 $R$ である $Q$ 」を指定するのである — 「だから被指定有は、(一方) それ自身 [被指定有としては] als solches (つきはなされたところの) 否定 (そのもの) である。しかし、(他方、外的反省によって) 前提された被指定有としては als vorausgesetztes — 被指定有は前提が自己反撥しての被指定有であるから「前提された被指定有」である — 、この否定は自己へと反省した in sich reflektierte 否定である。(否定は規定であるから) この意味で、被指定有は反省 (した) 規定である」(同) — 以上により、反省は、外的反省「 $A$ は $B$ である」が規定的反省になりつつある反省「 $x$ は $R$ である」・「 $x$ は $R$ である」を経て、今「 $Q$ は $R$ である」の反省そのものである — 。

労働「 $x$ は有用的労働である」(反省「 $x$ は $R$ である」)において、被指定有(「有用的労働である $x$ 」)は「否定性一般」として自然素材を規定して使用価値(素材的富)とする規定態である。けれどもこの反省は外的反省と統一して「絶対的な前提する運動」であるから — つまり人間的労働が絶対的な前提であるところの反省「人間的労働は有用的労働である」 — 、被指定有は「それ自体としては」つきはなされた否定すなわち有用的労働そのものであって、その「より大きい分量」が「より大きい素材的富をなす」。しかし「前提された被指定有としては」有用的労働は「自己(人間的労働)に反省した否定」すなわち人間的労働の否定としての有用的労働であるから、「素材的富の量の増大に — それは有用的労働の増大である — (否定的に) 対応して、同時にその価値の大きさが低下することもありうる」。この「対立的運動」についてはさらに詳細な考察が続けられる。

そこで反省規定についての一層の考察である — 反省規定に達してなお考察が続けられるのは、上述した反省の四肢構造把握の課題がまだ残っているからである。反省「QはRである」に即せば「(Q als R) als (R als Q)」の把握である。そのためには (一) Q・Rが互に有的な他者でないこと、(二) その両者が区別されること、(三) 区別されたものが合一すること、を明らかにする必要がある。(一) (二) は本パラグラフで、(三) は次パラグラフで説かれる —。(被措定有であるところの) 反省規定 (本質の規定) は有の規定態、すなわち質とは区別される — すでに一パラグラフで、本質諸規定が有の諸規定と別種の性格をもつことが説かれた。すなわちそれは本質の即且向自有という統一の中にとどまり、各規定そのものも他者としての他者でなく、また他者への関係でもなく、自立的なものであるが相互の統一の中にある in Einheit 規定である。以下ではこの本質の規定が詳論される。なおここでの「有の規定態」は反省「xはRである」における「Rであるx」がその例である。「Rであるx」が「他者という性格をまだもっている」(前パラグラフ) ことに注意 —。一方の質は他者一般に対する直接的な関係である。他方「被措定有もまた (上述した被措定有の一方の面、すなわち否定そのものとして) 他者への関係ではあるが、しかしそれは (被措定有の他者はすなわち被措定有の他方の面であるから、その) 自己への反省態 [自己反省態] Reflektiertsein in sich への関係である」(p.29)。質 (有の規定態) としての否定 (他者への関係) は有的なものとしての als seiend 否定であって、有がこの否定の根拠 Grund と要素 Element とをなしている — 「Rであるx」はxの他者であるから「質としての否定」であり、このときxそのものは存在しない (有的なものとしての否定) —。これに対して「反省規定は自己反省態をその根拠としている」(同) — 自己反省態は他の有ならぬ自己の非有であるから、自己は有的なものとして否定されず、他に移行しない。それゆえ反省規定としての否定は非有がその根拠である —。それで被措定有は、まさに反省がその否定態 [否定された有] Negiertsein (非有すなわち自己反省態) における自己自身との同等性 (即自有) であるゆえに、「自己を固定して規定である [自己を規定に固定している] das Gesetzsein fixiert sich zur Bestimmung」(同) — 自己反省態は当の自己への反省において「自己自身との同等性」すなわち即自有 (本来的な存在) であるから、つまりは規定 (そのものたらしめること) である —。かくして、他者へと移行する有の規定態とは異なる (止揚された移行である) 自立的な規定態が、規定的反省によって措定された。「反省の否定態は、それ自身 (他者へ移行しない) 自己内反省である。ここでは、規定は有によって成立するのではなくて、反省の自己同等性によって成立している Die Bestimmung besteht hier nicht durch das Sein, sondern durch ihre Gleichheit mit sich。質を担っているところの有は否定と不等な ungleich 有 (否定されることで他者になる存在) であるから、質もそれ自身において in sich selbst 不等であって、したがって移行するところの、他者の中で消滅する契機 *übergehendes, im Anderen verschwindendes Moment* である。これに反して *hingegen*、反省規定は (上述したように) 否定としての被措定有である」(同)。しかも、その否定は否定態を自己の根拠とし、ためにそれ自身において不等ではないような否定であって、反省規定は (さらに) このような否定 (否定としての否定すなわち否定そのもの) としての被措定有であり、したがって (換言すれば) 本質的な、移行しない規定態としての被措定有である。否定的な



もの das Negative を(他ならぬ)単に否定的なもの(否定そのもの)として、止揚されたもの das Aufgehobene、または措定されたもの das Gesetzte としてもつところの反省の自己同等性こそ、この否定的なものに存立 Bestehen を与えるところのものである」(同) — 反省「 $x$ は $R$ である」においても $x$ は「 $R$ である $x$ 」であるが、その否定的なもの「 $R$ である $x$ 」は $x$ の他者であるから、「否定そのもの」として完全に「止揚されている」のではない(「 $R$ である $x$ 」が「他者という性格をまだもっている」。この意味で前提 $x$ は外的な前提であり、「 $R$ である $x$ 」の存立は(本質ならぬ)有である。これに対して規定的反省において「 $R$ である $Q$ 」は、前提 $Q$ が絶対的な前提であるから「止揚され、措定されて」おり(「 $R$ (である $Q$ )」は $Q$ の否定そのものであって他者ではない)、このように「 $R$ である $Q$ 」の存立は絶対的な前提する運動としての「反省の自己同等性」にある。以上、上述の課題(一)が達成された —。

そこで反省(労働)「人間的労働は有用的労働である」が考察される。上述した素材的富の量とその価値の大きさを巡る「対立的運動は、労働の二面的性格から生じる」。すなわち労働は一面において「 $x$ は $R$ である」(「 $x$ は有用的労働である」)の反省であり、無であるところの人間の労働が「有的なものとして否定」され、有(有用的労働)が「この否定の根拠と要素をなしている」。他面でそれは「 $Q$ は $R$ である」(「人間的労働は有用的労働である」)の反省でありここでは絶対的な前提である人間の労働が有用的労働によって反省的に規定される。前者「 $x$ は $R$ である」において $R$ ( $R \cdot -R$ )は有用的労働の分量であり、その大きさは生産力に規定される — 「生産力は、もちろんつねに、有用的具体的労働の生産力である」。この記述は前パラグラフで説かれた内容を承けている —。つまり生産力は「ただ、与えられた時間内における合目的生産的活動の作用度だけを規定する」から、規定された有用的労働(有)は質として「他者一般に対する直接的な関係」であり、例えば $R$ が「一着の上着の生産に必要な有用的労働」であるなら $-R$ はその「一着の上着の生産に必要な労働が二倍に増加した場合の有用的労働」である。つまり生産力の否定は「他者へと移行する」ところの「否定と不等な有」であるから(否定されることで他者すなわち他の生産力に変動する、すなわち「生産力の上昇または低下」)、「質(有用的労働)もそれ自身において不等であって、したがって移行する」ところの「他者の中で消滅する契機であり」、それは「より豊かな生産物源泉ともなれば、より貧しい生産物源泉ともなる」。これに対して、労働の反省規定は人間の労働が絶対的な前提であるから「本質的な、移行しない規定態」であり、「生産力の変動[交替]は、それ自体としては、価値に表わされる労働にはまったく影響しない」。

「この自己への反省 Reflexion in sich のために反省諸規定(「 $R$ である $Q$ 」)は、(有的な)相互の牽引 Anziehung または反撥 Abstoßung をもたない空虚の中に im Leeren 浮んでいる schwebend とところの自由な諸本質態 Wesenheiten として現われる erscheinen」(p. 29) — ここで反省規定・本質態は $R$ の $R$ か $-R$ であることより複数形である。すなわち「規定態は『諸規定』としてあるが、本質は『統一』といわれているように一つであり、複数の規定が一つの本質の働きに依存していることによって相互に緊密に関連しあい・統一されている」(以文社

版 p.285 訳者注)。なお、反省規定が「規定されることによって固定され（移行しない規定態）、本質のもっている運動という性格が失われて、自己への反省という性格が前面にでたもの」が「本質態」であるが（同 p.300）、その本質態が「空虚の中に浮んでいるところの自由」であるかぎり、まだ真の自由ではない——。（そこで以下 *R* が複数である理由を考察すれば）「これらの本質態の中では、規定態は自己への関係（すなわち自己同等性・即自有）によって自己を確定し、自己を無限に固定している In ihnen hat sich die Bestimmtheit durch die Beziehung auf sich befestigt und unendlich fixiert」（p.29）。つまり既に述べられた「(外的な前提をもつ「AはBである」における) 自己の移行 [(有的な他者へ) 移行する運動] と (直接的な前提をもつ「xはRである」における) 自己の単なる被措定有 (すなわち有的でない一つの他者) とを (その前提の絶対的であることで) 自己に屈服させて unterwerfen しまっているもの、換言すれば、その他者への反省 Reflexion-in-Anderes を自己内反省に屈折させた [曲げ戻した] umbiegen もの、それが規定されたもの das Bestimmte である」(同)。「他者への反省」の屈服によって定有ではなくなり「全くの否定有の契機だけが残される」(Ⅲp.12「B 仮象」)から、「各々の(反省)諸規定は本質の中にあるものとしての規定された仮象 bestimmter Schein、すなわち本質的仮象 wesentlicher Schein を形成する」(p.30) —— 『反省規定』は、それが『反省そのものとしての規定態』であるかぎりでは、反省の他者ではないが、しかし『本質的仮象』(本質のなかにあるが、しかし仮象(直接態)という性格をもつもの)をつくりなすというかぎりでは、反省(=本質)の他者でもある(以文社版 p.300 訳者注)。かくして本質と反省措定が本質・本質的仮象として区別されたが、これすなわち *Q* (本質) と「*R* (である *Q*)」(本質的仮象)との区別である。上述課題(二)が達成された——。「この根拠からして、規定的反省は(「有の残り物」である仮象として) 自己の外に出たところの反省 die außer sich gekommene Reflexion (自己を忘却する反省) である」(p.30) —— 「自己を忘却する反省」とは、規定的反省の、「反省の他者ではなくしかもまた反省の他者でもある反省規定を措定する反省」であることを言う(以文社版 p.300 訳者注) ——。すなわち「本質の自己自身との同等性は(仮象であるという) 否定の中へ [において] in die Negation 消失した verloren のであり、否定が支配的なもの das Herrschende となる」(p.30) —— 「*R* である *Q*」の「*R* である (*Q*)」(否定)の面が支配的になったのである。すなわち本質的仮象であるが、それが一つの仮象であることで *R* はさまざまであり得る——。

さてマルクスは「生産力がどんなに変動しても、同じ労働は同じ時間内には、つねに同じ価値の大きさを生み出す」が、しかし「異なった分量の使用価値を提供する」と説く。例えば、一着の上着を生産する一時間の労働が生産力の増大により二着の上着を生産するようになって、変動前に生産された一着の上着の価値と変動後生産された二着の上着の価値は同じだといっているのである。そこで、元の生産力の二時間の労働が二着の上着を生産することを考えよう。すなわち今三つの労働があるのだが—— *A* : 一時間の労働が一着の上着を生産、*B* : 一時間の労働が二着の上着を生産、*C* : 二時間の労働が二着の上着を生産——、このうちここで言われる「同じ労働」はどれとどれであるか。無論マルクスが *A* と *B* との同一を言っているのは明らかであるが、しかしただ「同じ労働」であるなら *A* と *C* も「同じ労働」であるだろう。そして後者の「同じ労働」には、*A*・

CとBとが「異なる労働」であることが言外に含まれているだろう。では両様の「同じ労働」の異なりはどのように解されるのか。マルクスの説明は明快だが——「生産力は、労働の具体的有用的形態に属するから、労働の具体的有用的形態が捨象されるやいなや、生産力は、当然、もはや労働に影響を与えることができなくなる」——、ただしこの一文をもとにここで生産力が考察の外に置かれていると解するならば、それは浅い読みである。マルクスが生産力の労働に影響しないことを説くとき、生産力はマルクスによって無視されたのではない。それは止揚されるものとして、むしろマルクスによって採り上げられたのである。例に戻れば、AとBが「同じ労働」であるためには両者の異なりが止揚されねばならず、ここではそのことが説かれているはずである。

今労働は反省規定として「人間的労働は有用的労働である (QはRである)」だが、それは「自己への反省」によって「相互の牽引または反撥をもたない空虚の中に浮んでいる諸本質態」である。つまり  $Q \rightarrow \text{「(Rである) Q」}$  や  $Q \rightarrow \text{「(-Rである) Q」}$  として「自己への関係によって自己を確定し、自己を無限に固定している」から、それは「(Qとして) 労働の具体的有用的形態が捨象され」たところの労働の本質態である。つまり「これらの本質態においては」人間的労働が絶対的な前提であるから、規定態は「その他者への反省 (生産力の変動) を自己内反省 (人間的労働  $\rightarrow$  「(有用的労働である) 人間的労働」) に屈折させており」、したがって「生産力は、当然、もはや労働に影響を与えることができなくなる」。かくして生産力を異にする有用的労働 (すなわち「RであるQ」・「-RであるQ」の「各々の諸規定」) は「本質的仮象」であり、労働は今「自己を忘却する反省」である。すなわち「本質の自己自身との同等性 (「同じ労働」) は否定の中へ消失したのであり、否定 (「ところが、同じ労働は同じ時間内に、異なった分量の使用価値を提供する」) が支配的なものとなる」。

以上より、A・B・Cそれぞれの労働はそれ自体で自立的に an und für sich 存在するのではないということが理解される。それらは「同じ時間内に、つねに同じ価値の大きさを生み出す」という「本質の自己自身との同等性」によってはじめて把握されるところの諸本質態である。換言すれば、AとBとが「同じ労働」であるのは、両者が「同じ時間内に、つねに同じ価値の大きさを生み出す」からである。これに対して、一方「同じ労働」をAとCとにだけ認め、他方「同じ時間」に生み出される使用価値の大きさの異なりを理由にAとBを「異なる労働」とみなすなら、それは仮象する直接態を本質と錯認することになる。それは単なる人間的労働の把握であり、すなわち諸本質態が「自己に屈服させた」ところの「自己の単なる被措定有」としての労働の把握である (Aが「R (であるx)」ならばBは「-R (であるx)」であり、両者は「異なる」)。

否定 (対立) が中心であるから、「反省規定 (「QはRである」) においては、まず zunächst (対立する) 二面が区別される」(p.30)。第一に、反省規定は被措定有 (「RであるQ」) であり、否定そのもの Negation als solche である。第二に、それは自己内反省である——これは次パラグラフに後出する「絶対的な自己内反省」とは差し当たり zunächst 区別される——。一方の被措定有という面からすれば、反省規

定は（否定そのもの、つまり）否定としての否定である。したがって（否定としての否定であるからして）、この被措定有ということが、すでにその〔反省規定の〕（他者ならぬ）自己自身との統一である——この辺りの論理進行については、仮象が止揚されて本質であることの論理（七パラグラフ）が参考になる。「RであるQ」が「自己自身との統一」であるからQは他者でなく、つまりQ→「RであるQ」は他者への移行ではない——。けれども「反省規定は、まだ単に即自的にこの自己統一であるにすぎない。換言すれば、反省規定は、（即自的な統一から即且向自有に向かうから）それ自身において〔それのもとで〕自己を止揚するものとしての als sich an ihm aufhebend、すなわち自己自身の他者 Anderes seiner selbst としての直接的存在である」（同）。（反省規定がそれのもとで自己を止揚する直接的存在である、すなわちもはや直接的ではない直接的存在である、つまり非有である）そのかぎりでは、反省（本質）は（反省規定を措定するにもかかわらず、他者へと移行することなく）自己の中に〔自己内に〕とどまるどころの規定作用〔規定する運動〕in sich bleibendes Bestimmenである。本質は、その点では（まだ）自己の外には出ない Das Wesen geht darin nicht außer sich。すなわち（本質と反省規定という）区別された両者は（本質の規定する運動によって、区別されたものとして）措定されるやいなや、本質の中へ取り戻されている。ところが、（このことは反省規定の）他の面（すなわち自己内反省の面）からいえば、区別された両者が（実は）措定されたものではなくて、（単に）自己自身へと反省している in sich selbst reflektiert（関係だということである）。否定としての否定（すなわち被措定有）は自己との同等性（即自有）へと反省している（関係な）のであって、その他者（すなわち本質）へと、その非有へと反省している（関係な）のではない」（p. 30）。

さてマルクスは本パラグラフを「したがって、労働の多産性を、それゆえ、労働によって提供される使用価値の総量を、増大させる生産力の変動は、もしもそれがこの使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮させるならば、この増大した使用価値総量の価値の大きさを減少させる。反対の場合には逆になる」と締め括る。けれどもこの記述には奇妙さが付き纏う。なぜなら、マルクスはこの記述の直前に「生産力の変動は、それ自体としては、価値に表わされる労働にはまったく影響しない」と説いていたのであり、そうであれば、ここで再び「生産力の変動」の「価値の大きさ」を増減させることを説くことは既述と矛盾するだろうからである。

今労働においては「否定」が中心であるから反省規定は二面に区別され、一面で被措定有（「有用的労働（である人間的労働）」すなわち有用的労働であるから、この面において生産力はなお考察される。マルクスが「労働の多産性を、それゆえ、労働によって提供される使用価値の総量を、増大させる生産力の変動」について言及するのはこのためであった。そしてこの有用的労働すなわち被措定有は、「自己自身の他者としての直接的存在」すなわち非有として把握されており、そのかぎり労働（反省）は有用的労働を措定するにもかかわらず「自己の中にとどまるどころの規定作用である」から、本質（人間的労働）と反省規定（有用的労働）の「二つの区別は措定される

やいなや、本質の中へ取り戻されている（区別がなくなっている）。換言すれば、人間的労働と有用的労働がそれぞれとして把握されることなく（「否定としての否定（有用的労働）は……その他者へと、その非有へと反省しているのではない」、後者は前者の内にとどまるかぎりでの規定態である（「否定としての否定は自己との同等性（人間的労働）へと反省している」）——念のため一言すれば、「人間的労働と有用的労働がそれぞれとして把握される」と言っても、それは両者が悟性的に区別されることではない。この点次パラグラフで闡説する——。つまり「価値の大きさ」は反省された「使用価値総量」としてその「生産に必要な労働時間の総計」である。「QはRである」ないし「Qは-Rである」においては生産力は「それ自体として」把握されていた。これに対して「QはRである」においては、それは有用的労働が人間的労働（自己）自身<sup>・</sup>の他者である（自己自身への反省）ことで人間的労働に「影響する」のであった。一見既述と矛盾するかに見える本パラグラフの記述には、こうした論理の進行が含まれているのである。

(16) p. 79⇔Ⅲ「C反省」の「3規定的反省」の [3. 移行] p. 30～31

すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であり、同等な gleich 人間的労働または抽象的人間的労働というこの属性において、それは商品価値を形成する bilden。すべての労働は、他面では、目的を規定された形態での人間的労働力の支出であり、具体的有用労働というこの属性において、それは使用価値を生産する。

第二節の掉尾を飾る本パラグラフは初版の記述が大きく修正されている。それは次のようなものであった。

上述のことから次のような結論が出てくる aus dem Bisherigen folgt。すなわち、商品のなかには、もちろん、二つのちがった種類の労働 zwei verschiedene Sorten Arbeit がひそんでいるわけではないが、同じ労働が、その労働の生産物としての商品の使用価値に関係させられるか、それとも、その労働のたんに対象的な表現としての商品価値に関係させられるか、そのどちらかに応じて、その労働は、確かにちがったものとして、また対立したものとしてさえ規定される、という結論である。商品は、価値であるためには、なかんずく使用対象でなければならないのと同様に、労働も、人間労働力の支出として、したがって単なる人間労働として数え入れられるためには、なかんずく有用な労働、目的の定まった生産活動でなければならない。（初版 p. 31）

労働の二重性に関して結論を述べているという点では両版とも共通するが、ただし初版の「上述のことから」が、直接に「前パラグラフに述べたことから」の意味に解されると、誤読につながり易い。本パラグラフの課題は、前パラグラフで人間的労働と有用的労働との即自

的な統一であった労働を即且向自的なものとして把握し、そのことで両者が「もちろん、二つのちがった種類の労働」ではないが、ただ「確かにちがったものとして、また対立したものとしてさえ規定される」ことを説くことにあるからである。それゆえさらに、本パラグラフは「結論」のみを示し、それに至る論証は前パラグラフまでで済んでいると解するならば、これも誤読である。結論と共に、本パラグラフはここではじめて説かれるところの論証の最終局面をも含んでいるからである。したがって、第二版で労働の二面がそれぞれに取り上げられるのは、本節の標題が「労働の二重性」である以上、より標題に相応しい改訂だと言えよう——なお先にも触れたように、初版で「労働の二重性」論は独立した節ではなく、したがって「商品に表わされる労働の二重性」という標題も見られない。そして上に引いた初版の記述に続いては「これまでは価値実体と価値量だけが規定されたのであるから、われわれはいまや価値形態の分析に目を向けることにしよう」と記され、第二版で第三節に該当する論述が始まる。つまり初版では価値量が主題であったのであり、そのかぎりではあくまで人間的労働に焦点を合わせて論じる初版の上掲記述は整合的である——。

前パラグラフで説かれたように、「反省規定は（他者への反省でなく）自己自身へ反省した関係 reflektierte Beziehung in sich selbst であると共に、また被指定有であるから、そこから直ちにその本性が明らかになる」（p.30）。すなわち、一方「被指定有としては、反省規定は（前パラグラフで説かれたように）否定そのものであり、（つまり）他者に対立するところの非有であり、すなわち絶対的な自己内反省 absolute Reflexion-in-sich に対立するところの、或いは本質に対立するところの非有である」（同）——「絶対的な自己内反省」とは反省「QはRである」においてQは絶対的な前提であり、その前提された被指定有「RであるQ」が前提Qの自己反撥であることを言う（図式化すれば $Q \rightarrow$ 「RであるQ」）。そして被指定有がその絶対的な自己内反省或いは本質に対立する（を否定する）非有であるのだから、その「RであるQ」はQでなく、すなわち「R（であるQ）」である。前パラグラフで「否定としての否定（すなわち被指定有）は……その他者へと、その非有へと反省しているのではない」とされていたことが覆ったのである——。しかし他方「自己関係 Beziehung auf sich としては、反省規定は自己へと反省している in sich reflektiert」（同）。そして反省規定のこの反省の面とかの被指定有の面とは互に差別されている〔異なっている〕verschieden。そこで、一方反省規定の被指定有は、（反省の面と切り離されているのだから）むしろその（反省規定の）止揚態 Aufgehobensein（止揚された反省規定）である——「止揚された反省規定」は、反省規定が止揚されたことでその運動性格を失い、本質の契機となっている側面である——。他方、その自己反省態はその存立 Bestehen である——反省規定はQの自己への反省（ $Q \rightarrow$ 「RであるQ」）すなわち「R（であるQ）」のQへの還帰においてある——。ところが、こうして被指定有が同時に自己自身への反省であるかぎり——他者と非有として互に対立するものとされた反省規定の両側面が合—されている——、反省の規定態 Reflexionsbestimmtheit はそれ自身において〔それ自身のもとでの〕その他在への関係 Beziehung auf ihr Anderssein an ihr selbst である——反省規定の一面が同時に他面なのであるから、一面はそれ自身において他面に関係している——。つまり反

省の規定態は或る他者に関係付けられているような有的な、靜止的な *ruhend* 規定態としてあるのではない。すなわち、関係付けられるもの *das Bezogene* とその関係とは互に異なり、前者は一つの自己内有的なもの *ein Insichseiendes* であり、すなわち自己の他者とこの他者へのその関係とを自己から排斥する *ausschließen* ところの或るものであるという有的な規定態としてあるのではない—— 外的反省「AはBである」において、「BであるA」（有的な規定態）は、他者Aとも、また他者への関係（A→「BであるA」の「→」）とも区別されるところの規定態である——。そうではなくて、「反省規定は、それ自身のもとで規定された面であると共に、また〔同時に〕この規定された面の規定されたものとしての関係、換言すればこの規定された面のこの面の否定への関係である *Sondern die Reflexionsbestimmung ist an ihr selbst die bestimmte Seite und die Beziehung dieser bestimmten Seite als bestimmter, d.h. auf ihre Negation*」(p.31)—— 反省「QはRである」において、その「規定された面」は「RであるQ」であり、「この面の否定」は「RでないQ」すなわち前提Qである。つまりQ→「RであるQ」において、「R（であるQ）」はその否定Qへの関係（→）である——。有の規定（質）と反省規定を対比すれば、質はその関係によって他者へ移行し、つまり質の関係の中にその変化 *Veränderung* が始まる。これに反して「反省規定は、その他在を自己の中に取り戻している *zurücknehmen* [他者であることを撤回している]」（同）—— 「R（であるQ）」がその否定Qにおいて「その他者であることを撤回して」自己なのであるから「R als Q」——。反省規定は被指定有、すなわち否定であるが、しかしこの否定は他者への関係を自己に屈折させている *zurückbeugen*（そういった否定である）。したがって「この否定は自己自身と同等なもの *gleich* であり、自己自身と他者との統一である。またそのゆえにのみ、この否定〔被指定有すなわち反省規定〕は本質態なのである」（同）—— 被指定有「RであるQ」は「Q als R」だから、すなわち反省「QはRである」は四肢構造「(Q als R) als (R als Q)」であり、ここに反省論の課題は達成された。反省規定（本質態）は今否定として、その他者（本質）へと反省している。——。「それゆえに、反省規定は被指定有、すなわち否定であるが、しかし自己内反省である点では、反省規定は同時にまた、この被指定有の止揚であり、無限の自己関係である」（同）。

労働（反省規定）は、一面（「有用的労働である人間的労働」すなわち被指定有の面）では「有用的労働（である人間的労働）」として人間的労働に「対立するところの非有」であるが、他面（人間的労働→「有用的労働である人間的労働」すなわち自己関係の面）では人間的労働→「(有用的労働である) 人間的労働」として「自己へと反省している」。このように労働においてその二面は「差別されており」、被指定有は反省と切り離されて「止揚態」であるが、しかしこのことは「被指定有が同時に自己自身への反省である」ということであるから—— 人間的労働→「有用的労働である人間的労働」は被指定有「有用的労働である人間的労働」の「自己自身（人間的労働）」への還帰である——、反省規定は「それ自身のもとで規定された面であると共に、またこの規定された面の規定されたものとしての関係、換言すればこの規定された面のこの面の否定への関係である」。つまり労働は「目的を規定された形態

での人間的労働力（有目的労働）」であると共に、またその有目的労働の「否定への関係」すなわち「その他在（有目的労働）を自己の中に取り戻している」ところの「生理学的意味での人間的労働力」である。労働は前者「具体的有用労働というこの属性において」、その他者へ関係して「変化（規定態の変化すなわち有用労働の形態変化）が始まる」。労働はこの面で「使用価値を生産する」。また後者「同等な人間的労働または抽象的人間的労働というこの属性において」、その他者への関係を自己に屈折させて「自己自身と同等なものであり、自己自身と他者との統一である」。労働はこの面で「商品価値を形成する」。前節商品価値は「諸交換価値の共通物」（ハバラグラフ）という把握をその発始にその後も有論的に捉えられたが、それが今労働（反省運動）の中で反省論的に捉え返されたのである。

さて労働の反省規定（商品価値）は被指定有すなわち否定（例えば二十エレのリンネルは一着の上着ではない）であるが、しかしこの否定は他者への関係を自己に屈折させている。したがってこの否定は「自己自身と他者との統一（「20 エレのリンネル＝1 着の上着」という一つの等式）である。またそのゆえにのみ、この否定は本質態（価値形態）なのである」。つまり「反省規定は被指定有（相対的価値形態）、すなわち否定であるが、しかし自己内反省である点では、反省規定は同時にまた、この被指定有の止揚（等価形態）であり、無限の自己関係（「相対的価値形態と等価形態とは、同じ価値表現の、互に依存し合い、互に制約し合う、不可分の契機であるが、同時に、互に排除し合う、あるいは対立し合う、両極端、すなわち両極である」（『資本論』p. 82 第三節価値形態または交換価値）である」。かくして労働の二重性論（反省論）は価値形態論（反省諸規定）へと進み行く。

以上「労働の二重性」論の論理を一通り辿り終えた。前稿にも記したように、『資本論』の論理展開を辿ることは、筆者の問題意識においてソシュールの言語価値論を再構成する準備作業である。そこで、本稿で確認された論理の言語価値論において如何に連関するか、以下ごく簡略に示しておきたい。「本質的存在」の論理は、コトバにおける使用価値また有目的労働の把握に有効な論理を提供する。signifiant（能記）を使用価値に、signifié（所記）を交換価値に比定するテル・ケル派の議論を典型に、signe の二面を商品の二要因に準える論は少なくないが、これは使用価値が交換価値を担い交換価値が使用価値に担われる（前節四パラグラフ）ことに想を得た単純すぎるアナロジーである。そしてその単純さは『資本論』をひたすら historisch に読むことと無縁ではない。ただし、一部の論者の主張するように、経済価値と言語価値とのアナロジーそのものが無効だということではない。要は『資本論』の logisch な読みに徹し、コトバの研究がそこから示唆を得ることだろう（コトバを以ってコトバを論じることの困難に無自覚な、それゆえ厳格な論理を方法にもたない単純な言語研究は、そもそも言語研究の名に値しない）。それゆえこの段階での課題は、何よりもコトバにおける有目的労働とは如何なるものか、それを説明することである。



次に「仮象」の論理は、コトバにおける社会的分業の把握に示唆を与える。コトバの世界におけるロビンソン物語はウィトゲンシュタインの私的言語 *private Sprache* であるから、それがマルクスの私的労働とは異なって「社会的分業の自立的な一分枝」(セパラグラフ) たり得ない理由とその論理は、『資本論』から直接の示唆を得ることができるはずである。私自身は *signifiant*・*signifié* がこの段階ではじめて措定されるという見通しを持つ。

最後にコトバの反省論は言語形式の論理であるだろう。そこではコトバの *forme* (およびそれと対をなす *substance*) とが把握されると共に、言語の「外的形式」(森重敏『日本文法通論』四一頁) たる「音声・音韻・文字」がコトバにおける反省運動として把握される。とりわけ規定的反省たる文字の論としては、日本語を例に仮名が反省「*x*は*R*である」の、漢字が「*x*は*R*である」の、ローマ字が「*Q*は*R*である」の言語形式として措定され、これらの論理を経てコトバの論理はその「内的形式」の一たる「語彙」、勝義の連合関係 *rapport associatif* へと進行するはずである。

(本稿は平成 15 年度専修大学研究助成を受けた個人研究「価値論の研究」の一部である)

### 〈編集後記〉

夏期休暇も終わり、また例年のごとく後期のあわただしい毎日が始まりました。「月報」9月号は川崎誠所員「労働の二重性」の論理」をお送りします。川崎所員は本年「月報」1月号（No. 475）において、「商品の二要因」論の論理」を出され、本号はそれに続く労作です。二つの論稿に通ずる川崎所員の方法は、商品の二要因、労働の二重性を、いや『資本論』全体を、歴史的にではなく、むしろ論理的に読み解こうということであり、その場合、特にヘーゲル『大論理学』との一貫した対比が軸に置かれています。

川崎所員の構想は、実はこの『資本論』における上記二つの「論理」研究の先に、ソシユール言語学の再構成が予定されているとのこと。もっともそれは「シーニュ」の二面性（シニファン／シニフィエ）を単純に商品の二要因にアナロジーするのでは「ない」とのことなので、単純な編集子としては出鼻をくじかれた気がしました。果たしてどのような展開になるのか、門外漢ゆえ、本論末尾の氏の短い示唆は、理解出来ず、その点については、今後の氏の展開を期待したいところです。

（S. M.）

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044) 911-1089

専修大学社会科学研究所

（発行者） 柴田 弘 捷

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03) 3404-2561

---